
天使に愛の歌を

雪村 静馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使に愛の歌を

【Zコード】

Z3923U

【作者名】

雪村 静馬

【あらすじ】

僕と舞は姉弟でありながら、同時に恋人でもある。

誰にも知られないように時間を育んでいた二人だが、友人と思つていた七瀬が僕に告白したことでの運命の歯車が回りだす。

愛し合っているにも関わらず、舞と一緒にいることができなくなり・・・。

クスクスと声を潜めた笑い声が薄暗く狭い部屋に広がつていった。真夜中をすいぶんと過ぎた冬の日。白い壁を背にして、足の先から頭の天辺まですっぽりと毛布で覆つた僕らは、互いが互いを温めるようにして体を寄せ合つていた。一つしかない小さな窓から見える金色の月はとても綺麗で、冷たくて、どこまでも澄み切つた空に作り出した光輪。神々しいまでに輝くそれが、闇に沈んだこの部屋まで薄明かりで照らしていく。

「智也。^{ともや}もし、世界が明日終わつてしまつとしたら、あなたは何を願う?」

隣で何が楽しいのか笑つていた彼女は、内緒話をする時のように、ぴつたりと体を寄せてそう言つた。

「明日世界が終つてしまつなら、何を望んでもしうがないんじやないの?」

「また、そんな夢のないことを言つ

不満そうに下唇を持ち上げる彼女。それが彼女の癖であることを僕は知つてゐる。ずっと一緒にいて、ずっと彼女を見ていたからこそ、分かることだ。

僕は少しだけ考えを巡らした後、やっぱり最初に思いついたことに行きついて、でも、それも仕方のないことだなと思つた。

「僕は、舞の幸せを望むよ」

それが僕の思いつくただ一つの望みだから。

「明日世界が滅びてしまうのに？」

「うん」

「舞は？」と僕は訊ね返す。

「私もいつしょ。智也の幸せを願いつと願ひ」と言った。「智也が泣かないように、悲しくないように、苦しくないように、笑っていらっしゃるよう」、幸せでいらっしゃるよう・・・きつと、私は願うと思つ

僕より頭一つ分だけ小さい彼女の頬が肩に当たつて、僕は少しでも彼女がきつくない様に場所を調整する。二人の足が温もりを求めるように交差し、布ずれの音が微かにした。

「そつか、僕ら一人がお互いの幸せを望むのなら、たぶん一人とも幸せになれるだろうね」

「明日世界が滅びてしまつのに？」

גַּתְתָּאָרָה

それは確信に近い予感。世界が滅びることよりも、君が泣いている方が僕にとっては辛いのだから。きっと、君が幸せであれば僕も幸せでいられるだろう。

「一人の幸せか・・・」

膝を抱えるようにして自分の身体を丸めた彼女。毛布で唇を隠すように下を向いたから、長いまつげが金色に輝いているのを見つけた。栗色の髪からはシャンプーの香りがして、同じものを使つているはずなのに特別な香りのような気がしてしまつから、なんだか不思議に思えた。

「ねえ、智也」と首を斜めに傾けて、彼女はその美しい横顔で僕に問いかける。「私たちは神様にも背いているというのに、幸せになることなんてできるのかな？　願う相手がいないというのに、願いは叶えられるのかな？」

グイグイと頭で僕の肩を押す彼女。

小さな窓が外の冷気でカタカタと音を立てる以外は、まるで世界には僕と彼女しかいなくなつたんじやないかって思えるほどの静寂が支配していた。お互いの息遣いさえ感じられるほどの静寂。その静かで冷たい冬の部屋で、彼女の体温を強く意識する。

「神様なんていないし、いたとしても望みをかなえてくれるほど暇じゃないよ」と僕は外を見つめながら言った。

同時に肩に感じていた力が弱まる。

「そう言えば、智也は神様とか、昔から信じてなかつたわね」

「うん。偶然が必然と重なつて偶然を呼び、その偶然が奇跡と呼ばれる。ただそれだけだよ。だから、奇跡が起ることもないし、祈りが聞かれることもない」

「じゃあ、智也は誰に願うの？私が幸せであるよう……」

僕は彼女の形のいい瞳を見つめながら、やつぱり不安で仕方がないのだと分かった。神にも背いている僕らを、社会は受け入れてはくれないだろうから。この世界は受け入れてくれないだろうから。だから、どこにも居場がないなら、彼女は僕が守らないといけないんだと強く思った。

「僕は望むんだ。願うんじゃない。望んだことは努力するからね。奇跡なんてものに頼らなくたって、必然が偶然を、偶然が必然を呼んでくれるさ」

「それって、智也が私を幸せにすること？」

「ああ、僕以外に舞を幸せにすることのできる奴なんていないだろう？ それがたとえ神様でも僕は負ける気がしないよ」

だつて、誰よりも君が好きなのだから。愛しているのだから。全能な神がいたとしても負けることはないわ。

「じゃあ、私も智也を幸せにしてあげる」と彼女が笑った。

「頼もしいね」

僕が君の居場所になり、君が僕の居場所になつてくれる。なら、この世界が僕らを受け入れてくれないとしても、寂しがることなんてこれっぽっちもない。むしろ、僕らの方から世界を必要としないくらいだ。だつて、僕の世界は彼女なのだから。だから、彼女さえ傍にいてくれれば僕は何も望むものはないのだ。そう、彼女さえい

てくれれば・・・。

「姉さんは後悔しない?」

僕は急に感じた儚い感覚に突き動かされてそう言った。

「何を?」

月に照らされた薄明かりの中で、彼女は静かにそう訊く。琥珀色の瞳が一瞬だけ揺れたような気がして、その色の深さに吸い込まれそうになる。

僕はゆっくりと言葉を区切るようにしながら、一音一音、まるで話ができるようになったばかりの子供のように重たい口を開いた。

「僕と・・・付き合ってることを、後悔しない?」

姉弟でありながら付き合ってること、愛し合ってること。それが彼女は悔いてないだろうか? その不安はこいついう静かで冷たい夜に襲ってくるのだ。静かだから、寒いから、隣にある温もりの大切さを噛みしめさせられて、いつか失つてしまひなんじやないだろうかという不安が心を締め付けてくる。

「僕と罪を犯してしまったことを後悔している?」

情けない、と自分でも思つた。今、彼女が僕を幸せにしてあげると言つてくれたばかりじゃないか。それなのにもう、彼女を失うこと恐れている。彼女がどこか遠い場所に行つてしまつような気がして、もう手の届かない場所に消えてしまつような気がして、不安に駆りられてしまつてゐる。でも、どうしても、そう思はずにはいられなかつた。

「そうね」彼女は貝殻のような自分のピンク色の爪を撫でながら、「後悔がないって言うと嘘になるわ。だって、そうやって智也を苦しませてしまうことになつていいのだから」と言った。

そんなことはないと、慌てて否定しようとしたりけれど、それを遮るように人差し指を僕の唇にあてると、彼女は小さな子供に教え諭す時のようにやつくりと優しい声で微笑する。

「私たちは苦しんだ。私も、智也も・・・。そして、私たちは誰からも祝福されない未来しか持つていない。だから、罪の意識はあるし、もし地獄と言うところがあるなら、私と智也は一緒に落ちてしまつでしよう。だから、後悔はずつとし続けると思つ。これで良かったのか？ 智也にこんな人生を背負わることになつて良かつたのか？」つて

小さく息を吐き出した彼女は、「でもね・・・」と困つたように笑つて言つたのだ。

「私は智也を愛してしまつた。そして、智也も私を愛してくれた。それならどんな後悔も、苦痛も、侮蔑も、嘲笑も、きっと笑い飛ばせると思つの。私はきっとずるこから、何よりも智也から愛してもうつことを望んでしまつ

カタカタと音を立てる窓。外には綺麗な月が輝き、闇一色の空にうす明りを投げていた。僕はただその明りを見つめながら彼女の言葉を反芻する。幾度も幾度も。

「愛した相手に愛されたいと願つことがそんなに罪深いことなのだろうか？ そんなにすることなのだろうか？」

倫理と感情。それは光と闇のように相反するもので、常に一人の

関係を問い合わせ続けるのだろう。離れても感情が引き裂かれ、一緒にいても倫理が邪魔をする。どこにいても自分を責め、相手に許しを請い、そして触れ合ったびに心が痛むのかもしれない。それでも僕らは一緒にいることを選んだのだった。

「もし、舞がずるいというのなら、僕も同じだよ。姉さんが好きになってしまった。そして、愛する人に愛されたいと願つてしまつた。それをずるいというのなら、僕もずるい人間なんだ」

でも、「智也はズるくないよ」と彼女は言う。「だつて智也ほど真っ直ぐで公平な人はいないもの。私があなたをたぶらかしたのよ」

妖艶な笑みを浮かべて見せる姉さんは、やつぱり似合つていなかつた。どこまでも純粹で真っ白な女性。それが彼女だから、僕をたぶらかすなんてこと、とてもじゃないけどできやしないと思う。人からしてみればヒイキ目だとか、恋は盲目ということになるのかもしけないけれど、僕はそう言つのを差し引いても彼女ほど澄んだ瞳をした人はこの世界にはいないと信じているのだ。

「ねえ、智也。手、繫^いこつか？」

毛布の中で繫がる手と手。二人の指が互いに絡み合い、ゆっくりと結ばれていく。ひんやりとした感触に彼女が冷え症だったことを思い出して、包み込むように彼女の手をできるだけ優しく握り締めた。

「智也の手、あつたかい・・・

「姉さんの手は冷たいね」

静まりかえった部屋の中で、唯、彼女の息遣いが聞こえてくる。窓の外には金色の月。闇にぼつかりと浮かぶそれを見て、僕はなんだか切なくなつた。

舞みたいだ。そう思つてしまつたから。

この闇のような世界でたつた一つ穏やかな輝きを放つ月。それは僕にとっての彼女のようだつた。だから、月の傍に寄り添つ光がなにことが切なくなる。

「智也？姉さんつて呼ぶの、もつやめてくれないかな？」

僕が一人で考え事をしていると、彼女にしては歯切れが悪くそう言つた。

「どうして？」

「だって、私は智也の姉さんなんじゃなくて、恋人でしょ？」

「うん」

「だつたら」彼女は恥ずかしそうにうつむいた後、「いつも『舞』つて名前を呼んで、姉さんじゃなくて・・・」と言つた。

僕は小さな彼女の手を少しだけ強く握り返して、「分かつた。舞は僕の恋人だからね」と微笑する。

空気がひんやりと澄んで寒い夜。僕らは互いに体を寄せ合つた毛布の中で、静かに話をする。まるで世界から隠れているように。まるで世界を恐れているよう。でも、僕の隣には彼女がいたから、これ以上にないくらいに安心していられたんだ。

「智也・・・」

彼女が僕の名前を呼べば、何だってできる気がした。彼女の小さな笑顔を守れるなら、何とだって戦える気がした。だから僕はこの胸に溢れるくらいの愛しさを込めて彼女の名前を呼ぶのだ。

「舞、ずっと傍にいて」と。

窓から見える月の傍には、かすかに星が瞬いていた。

冷たい風の吹きつける街。レンガで舗装された歩道を蹴りながら、僕は月を見上げた。薄い雲が金色の輝きを覆うように流れていき、瞬く星が銀色の光を放つ。闇に沈んでいる部分はどこまでも深くて黒い色をしているというのに、月や星は決して飲み込まれることはない。それはあたりまえかもしれないけれど、特別な事のように感じるのだ。もし、僕に絵の才能があつたなら、この月と星を迷わず描いているのだけれど、と少し残念に思う。

「今日が何の日か、臯月くんは知っている?」

そう僕に聞くのは、同じ学部の七瀬香織。たまたま同じ授業を取っていたのもあって、大学に入学してすぐに話すようになった女子の一人だった。

「さあ・・・」

祝祭日に疎いと、いつも頬を膨らませる舞の顔が浮かんで、僕はぽんやりと今日が何用何日だったか思い出そうとする。なのに、七瀬は僕が思い出す前に、

「今日は十一月二十四日。クリスマスイブだよ・・・」と、呆れたように教えてくれた。

「そういえば、そうだった

「クリスマスイブを忘れるなんて、臯月くんくらいだと思つ

頭一つ小さい彼女。隣を歩く彼女を見ると、器用に片方の眉を

あげて見せてくれた。同時に長いポーテールが左右に大きく揺れる。

「明日がクリスマスだつてことは覚えていたんだけど、今日がクリスマスイブだつてことは忘れてた」

「なにそれ」

彼女のブーツがレンガを蹴り、あまり人通りの多くない街路に足音がこだまする。ヨーロッパの街並みを思わせる街燈の下で、カツン、カツンと、時を刻むように音を立てる。

「私たちの歳なら、イブのほうが、普通、大事なんじやない？」

「何で？」

「だつて」七瀬は、分かつてないなと言わんばかりに溜め息をつくと、

「恋人と過ごす素敵なクリスマスイブを、普通は期待するじゃない？だから、恋人がいればわくわくしながらイブを待つし、いなければ、それはそれで意識してしまうでしょ？」

「どうして、恋人がいないのにイブを意識するわけ？」

彼女は一度僕の顔をポカンと見つめると、呆れたと言わんばかりに額に手を当てる。

「だつて、羨ましいと思うじゃない、普通。あつちでもこつちでもカツブルが幸せそうにしているのを見て、恋人のいない自分には関係がないと思つても、ついついイブを意識してしまう。意識しない

みづにしていくことが、かえって意識させるよね

「そんなもんかな

「・・・そりよ

本当のところ、彼女の言つことは分からぬでもなかつた。もし、舞と一緒にクリスマスイブと一緒に祝うことができたなら、僕にとつても特別な日になつていただのかも知れない。でも、舞はクリスマスが嫌いだつたから、僕らには関係のない行事となつていた。

確かに一緒に暮らすようになつて、初めて迎えるクリスマス。僕らは一つ違ひだから、僕が中学二年、姉さんが三年の時。家でクリスマスの準備を始めようとしていた僕は、姉さんに呼び止められてこう言われたのだ。

「智也くん？ クリスマスが何の日か知つていい？」と。

当然プレゼントがもらえる日としか思つていなかつた僕は、その由来なんて考へてもみなかつたわけで、

「サンタクロースがくる日・・・かな？」と何とも幼稚な答えを返したのだった。

当時、まだお互いが一緒に暮らすようになつて間もないころだから、突然できた美人の姉さんとクリスマスを楽しむことで、少しでも仲良くなれたらという気持ちもあつたと思う。なのに、姉さんはいつになく真剣な顔をしたかと思うと、

「クリスマスはキリストの誕生日なの。智也くんはクリスチヤンじゃないでしょ？ 私も、私たちの両親もクリスチヤンじゃない。なら、どうしてクリスマスを祝うのかしら？」と僕に訊いたのだ。

今まで当然のように祝つてきたクリスマス。実際は皆がしているから同じように騒いでいただけで、何も考へていなかつた僕は姉さんのその言葉に面くらつてなにも言えなかつたのを覚えている。

そして、彼女は聖母のように優しく瞳を細めると、

「だから、敬虔なクリスチヤンたちが大事にしているクリスマスを、私たちが面白半分に祝つてはいけないと想うの」と言つたのだ。

その日から、僕の中でクリスマスは無くなつた。正確にはそのあるべき姿になつたとも言えるかもしれない。神聖な、自分とは関係のない日へと。だから、本当はクリスマスも、クリスマスイブも、その日付を全く意識していなかつたのだ、僕は。

「皐月くんは彼女、いないの？」

隣を歩く七瀬の突然の質問に、僕はドキリとする。

「いないよ。知つてるだろ？」

だつて、いつも七瀬とは顔を合わせてゐるのだから。

「高屋さんと、最近仲いいけど・・・付き合つて出したわけじゃないの？」

「全然違つよ。確かに最近よく話すけど、そんなんじゃないよ。実際、僕はクリスマスイブに七瀬と帰路を急いでるわけだし

分かるだろ？」と両肩をあげて見せる。

「確かにそうね」

彼女はそれで満足したのか、さらに追及しようとはしなかった。

「それこそ、七瀬は彼氏とかいないの？ 結構、人気あるみたいだけど

そう尋ねた僕に、彼女はさつきの僕を真似てか、
「分かるでしょ？？」と両肩をあげて見せた。

それは、七瀬に彼氏が出来れば僕にもすぐ伝わる、ということに
だろう。まあ、よく一緒にいるのだから当たり前か。

改めて横を歩く彼女を見る。田立ちのはつきりとした顔は、可愛い
いというより美人。小柄で細身のスタイルは、僕からするともつと
食べたほうがいいという気になるが、そこがいいと言う奴もたくさんいる。左右に揺れるボーネーテールは彼女の性格に合った髪形で、
サバサバしていて割と話しやすい七瀬によく似合っていた。正直、
うちの学部で気になる女子を上げると言われたら七瀬香織の名前を
上げる奴は多いと思う。なのに、それを鼻に掛けない気安い雰囲気
は、さらに彼女の人気を高めることになっていた。まあ、つまりは
悶々とした恋心を七瀬に抱いている奴が多いというわけだ。

「ああ、世間はイブで浮かれているつていうのに、私は淋しく明かりのついていない家に帰らないといけないのか・・・その点、皐月くんは実家通いでいいわよね」

「そうかな？ 逆に僕は一人暮らしをしている奴のことが羨ましい
けど・・・」

「そう？ こんな人恋しい夜に一人暮らしは悲惨よ」

そう言つと彼女は困つたように笑つて、

「私も彼氏、作っちゃおうかな・・・」と独り言のよつて僕の一步前を歩く。

「七瀬ならすぐにできるんじゃない？ 結構、気になるつて奴も多いし」

「そう・・・好きな・・・くん・・・ね

突然、冷たい風が僕らの間を吹き抜け、ぼそぼそと早口で言つた彼女の言葉は夜の街に流されていった。

「今なんて言つたの？」

そう訊きなおした僕に、七瀬はまた困つたように笑つて、
「何でもない」と首を振る。

洒落た街燈の下で伸びた一人の影。真っ黒に引き伸ばされた二人はカツカツと足音に合わせてレンガを蹴つていく。一步先を歩いて行く彼女の後を追つようにして、僕はスニーカーを前に進めた。

「ねえ」

ちょうど一人の家の分岐点に差し掛かった時、七瀬はいつもの「また明日」と言う代わりに、金色の月を瞳に映しながら、「海を行かない？」と僕を誘つた。

それは、独り言を言つ時みたいに、小さく感情の読めない声だつ

たから、なんだか彼女が迷子になつた子供みたいに思えた。

『淋しく明りのついていない家に帰らないといけないのか・・・』

彼女のさつきの言葉を僕は何故だか思い出して、胸のあたりが苦しいような、ざわざわした妙な気持ちになる。

「冬に海は寒いと思うけど・・・少しだけならついて行くよ

大きく引き伸ばされる一人の影。僕は再び歩き出した彼女の左右に揺れるポニー・テールを眺めながら、カツンカツンと時の刻まれる音を聞き続けるのだった。

「 いりしていると、世界の果てにいるよつな氣がしてこない？」

そう言つたのは七瀬だった。

見渡す限り広がる海、海、海。目の前に広がるその広大な景色と、波が静かに歌う音が、この場所にはあふれていた。天を仰げば金色の月が輝きを増し、銀の星が笑つている。僕はゆっくりと首を一回転させた後、

「世界の果てがあるとすれば、こんなとこりなのかもしれないね」と答えた。

僕らは立ち並ぶ住宅の間を抜けた浜辺に腰をおろして、膝を抱えるようにして溜め息を吐く。

黒い海が空の星や月を映し、波が揺れるたびにキラキラと輝きを放つ。それはまるで海の中に町があるみたいで、何とも言えない美しさだと思つ。

キラキラ・・・。
コラコラ・・・。

水面で屈折した不思議な光が乱反射して、神秘的ともいえる輝きを作り出す。ただここには美しさがあつて、僕らが知つている場所とも思えないほどに、懐かしく、暖かく、そして、哀しかつた。

「人は、あまりにも綺麗なものを見てしまつと、哀しくなるのねどうしてなんだろうね」

隣に座る七瀬に問いかけるでもなく、僕は独り言のようになつて

葉を落とした。

「そうね」彼女は自分の薄い唇に人差し指を当てた後、「それは人間が美しくありたいと願っているから……、求めているから哀しくなるのかもしないよ」と言つ。

人が美しくありたいと願うから。だから、哀しくなる。
なんとなく分かるような気がして頷く僕を、彼女が星のちりばめられた瞳で見つめる。

「自分の嫌なところとか、他人の嫌なところを見つけて……。少しずつだけど私たちは大人になるにつれ、『この世界が思っていたほど綺麗じやなかつた』って氣づくんだと思つ。でも、こうして本当に綺麗な場所を知つてしまつと、まだ望みはあるんじやないかつて思えるの。でも同時に自分の無力さも知つてしまつ。だから、哀しくなるんじやないかな？」

白い横顔が僕に同意を求める、海からの冷たい風に髪がさらわれる。僕は何度か頷いて見せながら、

「なら、大人になるつて言うのは哀しいことなのかな」と訊いてみた。

「ううん、私はそうじやないと信じている」

そう一言で締めくくつた彼女。でも僕はその言葉が妙に心地よく感じて、同時に嬉しかつた。

信じている。

短く、何の根拠もない言葉だけど、一番説得力のあるような気が

したから。

「皐月くんは人を好きになつたことがある?」

七瀬は水平線の向こうに浮かぶ月を眺めながらそう僕に訊いた。
どうしようもなくその人に夢中になつたことはあるか、と。

「うん」

「そつか・・・」

姉でありながら恋心を抱いてしまつた僕。それは、はじめから運命で決められていたかのように、自然と惹かれていた。だから好きになつたのがいつかなんて、僕には分らない。気がついた時には、舞に夢中だつたのだ。

「私も、好きな人がいるの」

七瀬は時折吹きつける風に、長いポーテールを流しながらそう言つた。

「好きで、好きで、たまらないのだけど、その人は私を見てくれなくて・・・。他に好きな人がいるみたい」

「僕の知つている奴?」

「まあね」

歯切れ悪く笑う七瀬。彼女は小柄だから、そつ言つ笑い方をすると全体的に幼く見えることがある。

「今まで、あんまり何かを願つたりしたことはなかつたんだけど、そんな余裕もなくなつてきたかも」

だつて、私を全然見てくれないから……。と七瀬は繰り返す。

「誰だらう？ 僕が知つていて、彼女がいて、七瀬に『全く』興味がなさそな奴？」

「そうそう。でも、まだ彼女ではないみたい。私が見た感じでだけど」

「ん・・・全然分かんないや

「だらうね」

そう彼女がどこか残念そうに笑つたから、僕はその相手のことがすごく気になつてしまつたのだと思つ。自分にできることがあつたら協力してあげようという気になつたから。

「一体、誰？ 良かつたら相談に乗るよ

「相手は内緒。それに皐月くんに恋愛の相談なんてできるの？ その手のことは『超』がつくほど鈍いでしょう？」

僕だつて彼女居るんだけど。

喉まで出かかつたこの言葉を飲み込んで、代わりにあいまいな微笑を返す。

僕と舞が付き合つてゐること。それは誰にも言つひとのできない

秘密。いつまでも秘密にするわけにはいかないし、できるとも思つていなけれど、少なくとも今は誰にも洩らすべき事じやない。それは僕ら一人の暗黙の了解。

「まあ、確かに鈍いかもしれないけど、話を聞くへうじはできるか
ら」

「うん、ありがとう

銀色の輝きを見せる彼女の睫毛。伏し目がちな七瀬のそれは、まるで涙で潤んでいるみたいに光っていた。

もし、僕にできるのなら、一人の間を取り持つてあげてもいいのに。七瀬とその男なら、僕らのように世間に遠慮しなくてはいけない間柄ではないのだろうし。何よりも、七瀬が喜ぶのなら、僕も嬉しいから。

「ねえ」そんな思案をしていると彼女は、「一つだけ訊きたいことがあるんだけど、いいかな?」と言った。

特別何かを訊ぐのに、断りを入れないといけない仲じゃないのに、改まってどうしたのだろうと思いつながら、僕は頷いて見せた。

「皐月くんは運命を信じる?」

運命。

それが彼女からの問。

その問い合わせが一体何を意味しているのか、七瀬がビックリつも

りでそう言ったのが分らないまま、僕は答えていた。

「誰かに決められた道筋を運命と言つなら、それはないと思つ。でも自分が何度も人生をやり直しても、その同じ決定に至つてしまつことは運命と呼べると思つよ」

「そつか。たとえば、皐月くんが『うして私と一緒にいることとか、学食のBランチばかり注文することとか、みんなシャーペンを使っているのに鉛筆を愛用していることとか?』

おどけたように言つてみせる七瀬。少し上田づかこに覗きこまれる瞳が笑う。

「やうやく、よく知つてゐるね。全部、僕の運命だよ

「運命もいろいろだね」

「七瀬は、運命はあると思つ。」

潮の香りが混じつた冷たい風。ザザアンと大きな波の音がして、気泡がはじけていった。

「運命はあるんだと思う。でも、私にやつてくるのは難しい運命かな。恋人になれない人の出会い……とかね

「それはまだ分からないよ。これから、その人が七瀬のことが好きになるかもしね」と僕は言った。

「うん。やうだといいけど、私は勇気がないから。振られてしまつたら、友達でいる方を選ぶの。あとは彼からの告白を待つし

かないんだけど、その見込は全くないしね。だから、私にやつてく
るのは難しい運命なの。」

出会つたことは必然で、後悔もしていないのにもどかしい。それ
が私と彼の運命なの。

七瀬はそう言つて、片方の眉をあげて見せた。

「でも」と僕は微笑した。「難しいからこそ運命と呼ぶに値するの
かもしれないよ。だつて、僕の鉛筆愛用の運命なんか、七瀬に言わ
れるまで気付かなかつたし、そのうちシャーペンになることもある
と思うから」

難しいからこそ、やり遂げたとき、本当に大切な運命になるんじ
やないかな？

僕がそう言つて、七瀬が自分の長いポニー・テールをそつと撫でた。

潮の香りを運んで行く冷たい冬の風。簡素な住宅が立ち並ぶこの
海岸線は静かで、ポツポツと窓から漏れる明かりが、石造りの防波
堤と洒落たベンチをぼんやりと浮き上がらせていた。

そして、小さな無数の星と大きな一つしかない月。

本当にここは世界の果てなのかもしれない。つい、そう思えてし
まう場所。寂しくて、美しく、哀しくて、優しい。

ザクツと音を立てて、隣に座つていた七瀬が立ち上がる。ブーツ
の踵が銀色の砂の中に沈み、サクツと小気味のいい音をもう一度立
てた。

「ユキ・・・」

「えつ？ 何？」

そう訊き返した僕に、彼女は幼い子供のよつた微笑を浮かべて、小さく言つた。

「雪が降つてゐる」と。

まるで、大きな音を出したらそれが消えてしまつみたいに、人差し指を唇にあてて、瞳で僕の視線をさうつ。

「本当だ・・・雪が降つてゐる」

真つ黒な空から落ちてくる純白の雪。それは一瞬天使の羽じやないのだろうか、と思つてしまつてしまひゆつくりと、ゆつくりと僕らのところに舞い降りてくる。月の光の中、星の瞬きの中、ひたすらゆつくりと・・・。

「ホワイトクリスマスだね。あつ、今日はイブだから、ホワイトクリスマスイブか」

七瀬がかすれた声で、でも嬉しそうにそう言つた。

「寂しがり屋の七瀬に、運命からの贈り物かもしれないね」

「なにそれ？」

「さあ？」

僕らは銀色の砂浜で顔を合わせる。七瀬のポーテールに一片の雪が止まって、僕のマフラーに止まって……。それがとっても綺麗だった。

「きっと、今日はいい気分で眠れる気がしない?」と七瀬が訊く。

「やうだね。やうだね」と呟つよ

「運命もたまにこなするね」

「たまには、いこいもじてもらわないとな。七瀬の運命は気難しいみたいだし」

クシュと笑う七瀬。やっぱりその笑みは小さな子供みたいで、でも、そんな顔をする七瀬はなんだか綺麗だった。

金色の円と銀色の星。静かな海はそつと歌を唄つて、冷たい風が潮の香りを運ぶ。そんな世界の果てみたいなこの場所に、雪がちらほらと降り始めていた。

天使の羽みたいだね。

そう初めに言葉にしたのは、僕だったろうか、それとも彼女だったろうか。そんなことも忘れてしまはほど、僕らは小さな輝きに見とれていた。

* * * : * * *

七色のステンドグラス。赤、橙、黄、緑、青、藍、紫が背中から差し込んでくる月明かりを透過して、ある物語のワンシーンを作り出していた。

ちょうどベールを頭からかぶった女性が、両翼の羽をもつ男に赤子を受けられようとしている場面。光臨がいくつも描かれていて、大事そうに母親の手にだかれようとしている子供は一際輝いていた。僕は小さなその子供が、人類史に残る聖人となることを知っている。

「もう、ミサは終わりましたよ

祭壇の前。七色の光を栗色の髪に写しながら、彼女は僕を見つめる。大きくて深い瞳。蠟燭の明かりで小さく揺れる輝きに、吸いこまれるんじゃないかつて気になる。

「いえ、僕はクリスチヤンじゃないので」

「そりなんですか？」

「ええ」

「クリスマスの夜に、クリスチヤンでもないのに教会へ来たんですか？」

「まあ、そり言ひ」とです」

変わった人ですね、と微笑した拍子に、彼女の来ていた白いコートが揺れて、ブーツが床をコツンと叩く。

「ここは何もありませんよ」

「でも、あなたがいます」と僕。

「私しかいません」

「僕もいるじゃないですか」

一瞬瞳を見開いた彼女は、細い指で口元を覆うと楽しそうにクシユッと笑った。

「確かにあなたも、私もいますね」

「ええ」

静かな夜だった。ただ、静かで何もなく、死んでしまいそうなくらい寒い冬のクリスマス。

見上げると高い吹き抜けの天井が音を拾い、僕らの立てる音が幾重にも響き合い、広がつていった。

さつきまで多くの出席者で埋まっていたらう長椅子も、今は冷たい沈黙をまとい、荘厳な音色を奏でるはずのパイプオルガンも、彼女の背に隠れてしまっている。

「あなたの名前を訊いてもいいですか?」と彼女は言つた。

「智也・・・皐月智也です」

「笛せさん・・・

「ナリナリです」

彼女は一度首をひねった後、なんだか懐かしい感じがすると、自分の胸の前に両手を重ねた。

「どうしてでしうね?..」

あなたの名前を聞いてこんなに胸が苦しくなるのは。

そう言って瞳を閉じた彼女との間には、小さな沈黙が横たわっているだけで、でもそれは居心地の悪いものではなかった。だから僕は、ゆっくりと彼女を見つめながら言った。

「あなたの名前も教えてもらひつていいいですか?」と。

クリスマスの夜。

七色の光に包まれた彼女に、僕はもう一度再会することになった。唯、静かで優しく穏やかな夜。どこまでも寒い空気の中で、僕の胸は炎が宿ってしまったみたいに、ドクン、ドクンと沸騰する。

彼女は小さく口を開いて、また閉じる。それを幾度か繰り返したあと、忘れていたその単語をやつと想い出したのか、ゆっくりと何かを確かめるようにして言った。

「私は、マイ。・・・皐月・・・舞です」と。

＊＊＊：＊＊＊

世界には幾千もの神様がいるそうだ。なら、幾千もの祈りがささげられても、それを叶えることができるのかもしれない。けれど、仮に六千人が一つずつ何かを願ったとして、それが叶えられたとしても、それは世界にいる人間のうち、ほんの〇・〇〇〇一%の願いしか実現しないことになる。

だから、と僕は言った。

「もし、神に何かを願つたって、それが叶えられたりはしないんだ」「ふ

「でも、その〇・〇〇〇一%に入るかもしないよ、私たちの願つたことが……」「

「そうだね」

僕は頷いてから、

「でも、あまり期待はできないと思うのが普通じゃないかな?」「と
言つた。

クリスマスの夜。一般的に聖夜と呼ばれる日に、僕と舞は公園のベンチに座つていた。ちょうど頭の上には大きな楓の木があつて、時折吹いてくる風に枝が凪いでは、ザワザワと静かにあたりを震わす。

「やっぱり、智也は夢がないと思つ

そう言つた姉さんは下唇を不満そうに持ち上げて続ける。

「どうして、そういうことを言つかな。願つたり叶えられるかもしないと思つた方が楽しいじゃない？」

「やうかな？ そう思つたら、努力しなくなつてしまつよ、僕ら人間は」

はあ、とため息をついて見せる舞。呆れたよつて両方の眉を寄せるど、

「それとこれとは別よ。努力は努力として、願いは願いとしてみる。そして、願いがかなつたらラッキーだと思つの。それのどこが悪いの？ 何でも平衡をとることが大事なのよ」と困つたように笑う。

それは、まるで母親が子供に教え諭す時のように、僕は少しだけ自分が恥ずかしくなつてしまつ。

二人の間を通り抜ける冷たい冬の風。

僕らは身をすくめながら、お互いの温もりを求めて身体を寄り添わせる。

「確かにそれも悪くはないね」

僕がそう言つて姉さんが笑う。

「でしょ」

どつちの考え方が正しいのかなんて、分からぬ。本当は祈りや願いは叶うのかもしないし、そうじやないのかもしない。でも、

舞が叶うところのない、それもいんじやないかといつ氣になる。

全く、一つしか歳はかわらないのに、この差は何なんだろう？

そう思つたら、苦笑が漏れた。

田の前にある公園の噴水には、クリスマスだからだろうか、虹色の照明が投射されていて、小さな飛沫がクリスタルのように輝いて見える。いつも昼間に見かけるコンクリート色が嘘のようだ、ひとつても華やかな光で人目を惹きつけていた。

「もつ、智也と出合つて五年になるんだ。早かつたね・・・」

掠れる声と七色に揺れる舞の瞳。僕の脳裏には五年前の、初めて出会つた時の姉さんの姿が浮かんで、懐かしいような苦しいような気持ちになる。だって、きっと僕は舞に初めて出会つたときには、もう恋に落ち始めていたんだと想つから。そう、僕の初恋はずつとあの時まま続いている。

「はじめまして、皇月舞です。今日からよろしくね、智也くん」

そう言つて、玄関で手を差し伸べてくれたのは舞だつた。当時中学生だつた僕は、以前の学校で可愛いと噂されていたどの女の子よりも綺麗な彼女に、ハッキリ言つてかなり動搖していた。それに、急に聞かされた母さんの再婚にも自分でもわからない苛立ちを感じていた時だつた。どうしようない感情と理性の間で、幼い当時の僕は途方に暮れていたのだと思う。だから、せっかく差し伸べてくれた舞の手を握ることなく、思春期特有の羞恥ずかしさと苛立ちにまかせてぶつかりぼつと言つたのだ。

「はじめまして」とだけ。

新しい親父はできた人で、正直、母さんが惚れるのも無理はないと思つた。女手一つで子供を育てることが今の世の中では大変だつてことぐらい、分からぬ歳でもなかつたし、母さんが自分の幸せを考えてもいいと僕は思つていた。けれど、頭では再婚のことは納得できていたのだけれど、心は落ち着かなかつた。

だから、僕は新しく引っ越してきた親父の家の中で、物置になつていた狭い三階の部屋を貰うこととした。舞は、自分の部屋と交換することを勧めてくれもしたが、かたくなにその部屋にこだわつた。だつて、一階の両親の部屋から、一番離れていられる場所だつたから。少しでも一人の顔を見なくて済むこの部屋を、好んだのだ。

でも、そんな理由で選んだこの部屋は、案外悪くなつた。なぜなら、一番静かで空が綺麗に見える場所だつたから。窓は小さいのが一つしかついてないけれど、そこから見える青は、邪魔されるものが何もなくて格別だつたのだ。

「今までこの窓からの景色に気付かなかつたわ。智也くんは空とか、好きなんだ・・・」

僕の部屋に来た舞は、そう言つて小さく笑つた。

「まあね。嫌いじゃないよ」

「私も好きだな、そつぱつつの」

「姉さんも?」

「ええ」

狭いから、何もない部屋。小さなテーブルとベッドと本棚。コンポやCDはもちろんなくて、生活感のほとんどない部屋だったけれど、僕は結構気に入っていた。

そのベッドに一人で腰かけて話をする。

「きっと、智也くんはすぐに新しい学校にも溶け込むと思つわ。でも、もし困ったことがあつたら、遠慮なく私に言ってね。あなたは私の弟なんだから、いつでも助けに行くから」

「うん」

すぐ隣でそう優しく微笑する舞は、当時の僕にとって、とても頼もしく思えたのを覚えている。

今より少しだけ幼い舞。

けれど、僕にとってはどんな大人よりも優しくて大きく見えた。

なのに、素直じゃない僕は、自分でも真っ赤になっているのを自覚しながら『ありがとう』の一言も言えなかつた。それでも、気を悪くすることなく手を差し伸べ続けてくれた舞に、僕はとても感謝しているし尊敬もしている。

「あの時は緊張していたのかもしれないな」と、隣で虹色の噴水に見とれている舞に言つた。

「あの時?」

「そう、舞と初めて会つた時」

「突然新しい家族ができたんだから、誰だつて緊張するよ」

右の耳に髪をかけながら、彼女は微笑する。

私だつて緊張していたんだから。

「でも、僕が緊張したのは、舞のせいだと思つ」

だつて、と僕は続けた。

「突然綺麗な姉さんがきて、しかもあんなに優しかったんだ。声をかけられるたびに嬉しさ半分、恥ずかしさ半分だったと思つ」

一瞬舞は、キヨトンと何を言われたのか分らないという顔をした後、クシユツと笑つて見せて、

「智也くん・・・可愛いね」と言つた。

そう、僕は幼くて、未熟で、可愛かった。

それまで、自分の部屋に女の子を呼ぶなんてことがなかつた僕は、すぐ隣に座つて話をする舞を意識せずにはいられなかつた。狭くて倉庫みたいな部屋が、姉さんが来るだけで花が咲いたように明るくなつた。彼女から時折する甘い香りに、頭の奥がしごれてしまうような心地の良い痛みがして、穏やかなで澄んだ声に心が大きく跳ね上がつた。

「もう、あの時には舞を好きになり出していたのかもしれないし、

少なくとも憧れぐらいいの気持ちはあったのかもしれないね

「やうなの」

「うふ、きっとやうだと思つ。僕の一番の味方は、ずっと舞だし」「私は」彼女は一度素早く瞬きをして、「・・・私は、智也の良いお姉さんをしていたかしら？ 智也が不安で仕方ない時に、確り支えられたかしら？」と訊いた。

美しい横顔が七色の光を受けながら、僕に問い合わせる。ザワザワと静かに風いだ枝をチラリと見上げて、僕はそっと彼女の指を絡めとつた。

「僕にはもつたといないくらい、いい姉さんだよ。ありがとう」

「ん

満足そうに微笑する舞。僕はできるだけ優しく彼女の手を握る。まるで、纖細なガラス細工のように、儚く純粋な雪のよつて、そつと力を込める。

これからは、と舞の瞳を僕は覗く。

「僕が、姉さんを支えるから。今までずっと支えてくれた分、今度は舞の恋人として僕が支えるから」

形のいい彼女の双眸が少しだけ揺らめき、そして、嬉しそうにケシャツと子供のように笑う。

「ありがとう」

もう僕は、あの時の幼い僕じゃない。姉さんにただ憧れて、恥ずかしくて、いつも赤くなっているだけの僕じゃない。だから、今度は僕が姉さんを守らないといけないし、頼つてもられるように努力しないといけない。

舞が悩んだ時、迷った時、僕が一番に力になつてあげられるようにしつかりしなくてはいけない。

ぼんやりと漂う夜の雲を見上げながら、僕は心にそう誓つた。

「ねえ、あそこのクレープ屋さんに行つてみない？」

「クレープ屋？」

舞の視線を追うと、可愛らしい洒落た車を改造したクレープ屋がパステルの屋根をあげていた。よく、遊園地とかでありますなやつだ。

「ね、いこー！」

僕の手を引く舞。無邪気に笑う彼女の笑顔がいつまでも壘ることがないように、もっと彼女に相応しい人間にならないといけない。

七色の噴水を背に、僕は空いたもう一つの手を強く握り締めたのだった。

「どうして、外で買ったクレープは家のよりおにしこんだらうね?」
煉瓦作りの歩道を蹴る。僕の隣で機嫌よくしている舞は、先ほど
買ったクレープに上機嫌だつた。

「さあ、気分の問題かな?」

「あつ、それはあるかもしれないね」

ヨーロッパの街並みを思わせる街燈が影を並べ、じいじんまつとし
た洒落た住宅が軒を差し出していた。僕は一步前にある舞の影の先
を見ながらスニーカーを進める。

「智也」といひして一人で歩くのつて、いつぶりかな?」

形のいい、飴色の瞳が僕にそう訊いた。

「きっと、数か月ぶりくらいかな」

「だよね、すつぐく久しぶりの感じがするもん」

「そうだね」

「智也、大学のレポートとか、講義とか、忙しかったもんね。それ
に、私も色々あつたし」

溜息を吐くよろに彼女が言つて、僕は頷いた。

静かなクリスマス。僕らには何の関係もない夜だったけれど、いつもとは少しだけ違う街の様子は、今日が特別な夜だと思ひだすには十分だった。

仄かな明かりと、楽しそうな笑いの漏れるオレンジ色の窓。

イルミネーションでかたどつたサンタとトナカイがチカチカと輝いて、ちょっとしたカーニバル見たいだった。

「こんな日もいいな。

そう、思えてくる。

少しだけ特別で、幸せな日。たぶん、日頃は過ぐすことのできない時間を取り戻している家族も、このオレンジ色の窓の向こうにいるのかもしれない。

「智也?」

そんなことを考えていると、不思議そうな顔をした舞が僕を覗き込んで言った。

「智也はクリスマスが気になるの?」

「まあ、気にならないっていつたり嘘になるのかもしれないけどね。でも、昨日まで忘れていたことだし……。友達も帰れてたくらいだし」

「そう」

フワリと舞うワインレッドのマント。カツンと煉瓦をブーツが叩いて、栗色の彼女の髪が曲線を描く。

「クリスマスにデートって恋人みたいね」と舞は言った。

「うん、本当はイブが恋人の日らしいけど

「うう」

「うん」

それは、昨日七瀬に教えてもらつたこと。

それなら、と彼女は続ける。

「一日遅れの恋人の日だね、智也

飴色の瞳。それが嬉しそうに細められて、ドラマの女優みたいに腰を屈める。だから、なんて絵になる女なんだうつて、僕は思つてしまつた。薄い艶やかな唇からは貝のような真つ白い歯がこぼれて、僕はこの世界で一番素敵な人に見とれてしまつ。

舞。

僕の姉。

そして、僕の恋人。

僕は彼女のこの瞳が大好きだ。

深くて優しく、どこまでも澄み切つたこの飴色の瞳が。

「智也？」

「ん？」

「どうしたの？」

いつまでも動こうとしない僕を不思議に思つて、彼女がそう訊く。
僕は自分で苦笑とも、照れ隠しとも分からぬ曖昧な笑みを浮かべながら言った。

「舞に見とれただけだよ。綺麗だなって」と。

一瞬何を言われたのか分らなかつたのか、動かなくなつた舞は、ハツと僕から顔を背けると早足で歩きだした。

カツン、カツン・・・。
カツ、カツ、カツン。

僕もそれに合わせるように歩幅を広げる。

「どうしたの？」

一步先を行く舞にそう訊くけれど、まるで僕を無視するように前を見つめて足をゆるめようとしない。

彼女の刻む音に合わせて揺れる栗色の髪。たくさんのイルミネーションの中を弾むように広がつて、僕はそれを掴むように伸ばした手で細い肩に触れた。

弾かれたように振り返つた舞。

彼女は夜でも分かるくらいで、耳まで真っ赤にしていた。

「どうしたの？」

何度も、瞬きを繰り返した彼女は、少しだけ唇を震わせると、僕にしか聞こえないくらい小さな声で言った。

「恥ずかしいけど、嬉しいの」と。

僕はその瞬間、この胸に溢れんばかりの愛おしさが込み上げてきて、弾かれたように小柄な体を力一杯抱きすくめる。

「キヤ・・・・

小さな抵抗の声が聞こえたけれど、止まることはない。どうしようもなく愛おしくて、切なくて、胸が痛いくらいに舞が欲しかった。

「智也・・・・

どうして、この女は僕のことが好きでいてくれるのだろう？ 誰もが振り返るくらい綺麗で、可愛くて、僕には決して手の届かないような人なのに・・・。なのに、この世界で一番素敵なお嬢さんは僕の恋人でいてくれる。

「舞

「智也・・・・痛いよ」

「うん」

「痛い・・・」

「うん、ごめん」

腕に込めた荒々しい気持ちを静めて、今度は出来るだけ優しく、そっと彼女の背に腕を回す。

「僕、舞のこと、好きだ」

「うん」

それは心の底から絞り出したような言葉。今、全ての人と言つてしまいしたかった。この人は、舞は、僕の愛する人なんだって。『彼女』と言う言葉ではとても表現しきれない。あえて言うならば、『運命の人』と言う言葉が一番いいのかもしれない。そのくらい、僕は舞に惹かれている。でも、それは内緒の関係。

「私も、智也が好きよ」

「うん」

クリスマス。

人々に幸せを贈る一年に一度の特別な日。

それはこんな形で僕を幸せにしてくれた。自分には関係のないと思っていた日なのに・・・僕は幸せだった。

「ねえ、ねえ、智也」

僕の肩に顔を埋めるようにしていた舞が、耳元で、掠れる声で言った。

「雪が降ってるよ・・・」

見ると、ゆっくりと羽のよじに地上に舞い降りてきている雪。それが舞の肩に止まり、髪に止まり、そして、溶けていく。

「本当だ」

僕らはぴったりと抱き合つたまま、静かな住宅街の角で息をひそめる。まるで、大きな音を立てたら、その儂い存在が壊れてなくなってしまうんじゃないかって思えたから。

「きっと、今、私たちの上を天使が通っているの」

「天使が?」

「そうよ」

舞は何故だか自信たっぷりに頷くと、「だって、雪って天使の羽みたいじゃない? それに、雪が降つているのを見ると嬉しくて、幸せになるでしょう?」と言った。

天使の羽・・・か。

そう言つたのは僕だつたろうか、七瀬だつたろうか? 初めに言い出したのがどちらかだなんて忘れてしまつたけれど、確かに僕は雪のことを天使の羽みたいだと思つた。だから、
「確かにそうかもしれないね」と言つた。

「あれ？ 智也にしては珍しいのね。いつもなら、いつも通りの

定的なこと

「そうだね

確かにロマンティストではない僕だから、いつもならいつもには否定的かもしねりない。

でも、と僕は言った。

「今日はクリスマスだから、そう思つのかもしれない。だって、こんなにみんなが幸せそうにしていて、僕も幸せなんだから。今夜は特別な日だよ」

「そっか・・・」

静かで、寒くて、でも、舞と一緒に暖かくて。

「なんだか、少しだけ恋人の日つてクリスマスが、正確にはイブかもしれないけど、・・・言われる理由が分かったよ」

「私も」

「うそ」

僕らはお互に回していた腕を静かに解き、そのまま指先を絡めるようにして手を繋ぐ。

ひんやりとした舞の手は、手の中をぎゅうぎゅうと収まる大きさで、その小さな感触にそつと力を込める。

一面イルミネーションに彩られた街を、ゆっくりと歩き出す一人。

今日はクリスマス。

特別で幸せな夜。

でも、僕らはクリスマスではないのだから、慎ましく、この聖夜を過ぎようと思つ。

？ Rainy Day (1)

＊＊＊：＊＊＊

「サツキ・・・確か、あなたも皐月さんでしたよね？」

「ええ」

「す」い偶然・・・」

そう言つて彼女は、可愛らじく小さな手のひらで口元を隠した。

今夜はクリスマス。

僕はクリスチヤンではないけれど、この教会へと足を運んだ。そこで再開した皐月舞。彼女は昔と変わらない姿で、僕の前に立っている。

「確かに偶然かもしれない。僕と君が同じ姓を持っているのは

だつて、偶然に僕らは姉弟となつたのだから。彼女の言つた意味とは違うかもしれないけれど、間違つてはいない。

一度、自分の胸に手を当てて、気持ちを落ちつけようと、そつと深呼吸を繰り返す。自分でも緊張しているのが分かつていてから、喉が大きく鳴つて、これから言葉を頭の中で何度もリピートした。

「そう言えば」その先手を打つよし、彼女はおつとつした柔ら

かい口調で言ひ。

「私、ちょっと記憶が曖昧みたいで・・・さっき、名前を思い出そうとした時も、すぐに出でこなかつたし、どうしてこんな場所にいるのかも分からなくて・・・」

そんなことだらうと思つた。僕は彼女の瞳を見つめながら、本当に気になつてこるその言葉を口にする。

「僕の・・・僕のこととは憶えていますか？」

「えつ」

一瞬大きな瞳をさらに見開いた舞。高鳴る鼓動。

でも、彼女は小さくかぶりを振ると、
「知つてゐる氣はするんです。こう、胸の奥の方があなたのことを
感じてゐるみたい。でも、記憶としては、私はあなたを知らないん
です」

申し訳なさそうに言う舞

伏せた睫が蠟燭の明かりで金色に輝いて、白いコートの前で組ま
れた手が所在なさげに動く。

「いいんです。憶えていなくとも

僕は唯、舞に会えたと言つただけで、十分なのだから。

以前はぴつたりと肩を寄せ合つていた僕らの距離は、歩けば数歩

の間隔にまで広がってしまっていた。何もないタイルの敷き詰められた床。今は、その空間がひどく遠くに感じてしまう。それでも、こうして再開することができたんだ。もつ、一度と会えはしないと思っていたのに・・・。

だから、それだけで、僕は十分だった。

「私はあなたの家族なんですか?」と彼女が訊いた。

「そうですね。でも、家族という関係は半分だけ正解です」

「半分だけ?」

彼女が僕の答えに眉を寄せた。

「僕と君は姉弟だったけれど、それ以上の気持ちをお互いに持っていました」

「え?」

深く頷いて、飴色の瞳を覗き込む。

大きく見開かれた、それを。

僕の大好きだったその澄んだ瞳を。

ゆづくつと深呼吸をするようにして息を吸い込んだ僕は、この冷たい冬の空氣に白い言葉を吐き出した。

「僕と・・・君は・・・恋人でした」と。

*
*
*
:
.
*
*
*

あの日の夕方は、まるでその時間だけ別の日の空をくつつけたような一変の機嫌の悪さで、レポートの提出に手間取つて遅くなつた僕を驚かせてくれたのだった。

朝から快晴を疑わなかつたのに、急に変化した空模様。当然傘を持つてきてなかつた僕は、置き傘を取りに学部控え室に向かつた。

ある意味、隔離された研究室にむづきまでいたから分からなかつたけれど、こうして校舎の廊下を歩いていると、その薄暗さに時間の感覚さえおかしくなつてしまいそうだつた。だつて、いくら冬と言つても、まだ明るいはずの時間なのに、窓から覗く湿っぽい景色は、すっかりモノクロームに覆われてしまつていたから。

「一段と寒いな」

僕はそつ溜め息を零しながら、ジャケットの首元を両手で覆つた。進む足も、自然と先を急いでいる。そして、こんな日はマフラーをしてこなかつた今朝の自分を後悔する。

暗い校舎と灰色の空。

それは寒い冬の夕方を、もつと憂鬱にしてくれるものだった。

やつと長い階段を往復してたどり着いた広い校舎の玄関口は、強く降り付ける雨音に溢れていて、湿っぽい匂いが香水のようにムツと胸を詰めさせる。

本当にひどく憂鬱だ。

「この雨の中を、両肩を小さくしながら帰らないといけないのか…」

暗い空に溜め息一つ。重たい灰色がもつと重たくなる。

このいつ止むとも分からぬ雨が上がるのを、少しだけ待つてみようか、ほんの一瞬だけ考えて傘を開いた。だって、明日になつとしても、決して止みそうにないくらい、勢いよく空は泣いていたから。

「ねえ

たぶん、靴の半分くらいは、雨の中に出していたと思う。

振り返った僕を追い越すよしひして、彼女は傘の中に入ってきた。長田のポニー・テールが、この空模様に不似合いなくくらい元気に揺れて、ふわりと甘い香りが僕の鼻腔をくすぐった。

「傘、忘れちゃったの。入れてくれない?」

七瀬は形のいい眉を片方だけ上げてやう言った。

「うん、いいよ…」

苦笑して一人で入るには小さく傘の半分を差し出す。

「ありがと」

並んだ七瀬の頭は、僕の肩くらい。楽しそうに雨の中に踏み出す彼女につられるようにして、一步、また一步と灰色の空の中に僕は踏み出していった。

「全然雨が降りそつじやなかつたのにね。朝あんなに晴れていたから、いつもよりも薄着だし・・・本当にサイアク」

「本当に

肩をすぐめながらそう僕は合図地を打つ。

彼女の言つ通り本当に最悪。もし、天気予報の意味があるとすれば、こんな誰もが予想できない日のためだろつ。なのに、こういつ、ここ一番の場面でことじとく予報を外して、どうでもいい日に何割かしかない正解率を使つてしまつているような気がする。

そう言つた僕に、彼女は声を出して笑つと、「それつて、予報士さんたちに悪いよ」と言つた。

いつも人通りのそんなに多くない道。小さな店が慎ましく営業していく、寂れているわけじゃないけれど忙しいわけでもない通り。でも、今日は激しい雨のせいで僕ら一人以外は誰もいなかつた。店の明かりも幾分、この激しい雨の中でぼやけて見える。

透明な雨と、湿っぽくて甘い香り。

それは隣を歩く七瀬の匂いなのだろうか？ 僕はこいつそつとその香りを追う。

「ねえ、皐月くんは雨・・・嫌い？」

「え？」

彼女は自分の足の先を見るようにしながら、もう一度僕に訊く。

「雨は、嫌い？」

私は、雨、好きなんだ。

うつむいた七瀬はそう言った。

「僕は好きじゃないかも。だって、いつもって雨が降ると寒いしさ」

「そっか」

「うん」

パシャヤッヒ、音がして、僕らの靴が水たまりを蹴る。

煉瓦の隙間を縫つゝ細い水が流れ、坂の下へと。

「どうして、七瀬は雨が好きなの？ 雨を喜ぶ入ってあんまり見ない気がするけど」

「そうだね」

彼女は両手をコートのポケットに突っ込んだ格好で、大きくブーツを踏み出して言った。

「だつて、静かなんだもん」

「静か?」

「そう」

「雨が降つて、こんなに音がしているのに?」

「そう」

雨音は心を静かにしてくれるの。穏やかって言った方がいいかも
しないけれど。

そう彼女は笑った。

傘に当たる透明な雨。絶え間なく続く音の連鎖は、空が灰色である限り止むことはない。僕は半分の肩を濡らし続ける雨を視界の隅に捉えて、「やっぱり、僕は、雨は嫌いかもしない」と溜息を吐いた。

「そう」

二人の男女に、一つの傘。やっぱり、七瀬は小柄だったけれど、二人に入るにはこの傘は小さくて、僕の右半分は空の下にさらされていた。奪われる体温に体はどんどん冷えていく。

「ねえ」と彼女。

「何?」

「皐月くんの好きな人って……誰?」

カツンとレンガを蹴る音が規則正しく兩音の中で響く。

カツン、カツン。

カツン、カツン・・・と。

僕はチラリと整っている七瀬の横顔を見ながら、「七瀬の知らない人だよ」と言った。

「そつか」

それならさ、と彼女は続ける。

「その好きな人に告白は、したの？」

感情の見えない白い横顔。うつむいた前髪に少しだけ雫が止まつて、震えて、落ちていった。

「いや、僕の片想いだから」

嘘を吐いた。

「そつの」

「うん」

「それならさ」と彼女は言った。「告白、してみたらいいじゃない。イブの日に、私に言つたみたいに。言わないと分からぬこともあるわけだし」

「そうだね」

「だから、言つてみるだけ、言つてみたら?」

小さく頷いて、そうしてみるのもいいかもね、と僕は言った。

早まる雨の勢いは、空が暗くなつていいくにつれてますます激しくなり、履いていたスニーカーはすっかり水をかぶつてしまつた。ぐつしょりと濡れた右の肩がやけに重く感じる。

「あそこで、ちょっと雨宿りしない?」

吹き付ける霧を含んだ風に顔をしかめながら、七瀬が小さなバス停を指さした。ちょうど店の途切れた場所に作られた、緑の屋根の慎ましいバス停。僕らは駆けこむようにしながら、その囮いの中に入つた。

「ここなら、少し休むにはいいかも」

「そうだね」

中に備え付けられたベンチに鞄を放り出して、溜息をついた。目の前を斜めに落ちていく雨の線が、視界を遮つてしまつほどに今日の天気は強烈だ。

「皐月くん・・・肩

彼女は僕の肩がぐつしょりと濡れているのを見つけると、大きな瞳を丸くして、慌てて自分の鞄からハンカチを取り出す。

「私を濡れなこよつにしてくれたからだね」

「僕は濡れても風邪引かないから、自分を拭きなよ」

押し当てられたハンカチを返しながら、そう言った。彼女だって、やつぱりこの雨の中では濡れてしまっていたから。

「ほら、なんとかは風邪引かないつて言つじやん」

「そんなこと言つて、馬鹿じやないでしょ？ 皐月くんは」

「やうっ.」

彼女は僕の軽口に真剣に頷くと、

「だから、風邪、引いちゃうよ」と言つた。

湿つぽい雨の日特有の香りが、まるで香水のようになたりを包んでいた。そして、そこら中の道路は、急に降ってきた大雨を受け止めて、池のようにつつすらと水を張つてゐる。その表面を叩きつけるようにして降つてゐる、雨、雨、雨、雨・・・。

僕らはモノクロームの世界に置き去りにされてしまったかのようには、誰もいないバス停で佇んでいた。

「やう言えばや」

彼女は少しの間の沈黙をかき消すように、ポソリと呟つた。

「皐月くんは人魚姫のお話、知つてる？」

「大雑把なら」

「そう」

それなら、と真っ白な横顔で彼女は訊く。

「人魚姫が最後、泡になつて消えてしまつのは知つてゐる?」

「うん」

「あれつて、どうしてなんだろうね? 別に恋が実らないからつて、泡になることないと思わない?」

「まあ、そうだね」

確かに言われてみれば王子様に愛されなかつたからと黙つて、泡になつて消えてしまつというのは、物語特有の大げさな設定に思える。

「私はずっと不思議に思つてゐたの。どうして、人魚姫は泡になつたのか……」

「でもね、私、分かつたような気がするの」

「どうして?」

「たぶん……」

雨で冷たくなつた体を抱きかかるよつとして、両手を組む七瀬。

「人はたった一人のヒトを愛するよう、運命で決められていくからだと思つ」

「そう?」

「だから、人魚姫は泡になつたんじゃないの。きっと運命の恋が叶わなくて、歳をとつて、普通に死んだの」

それは、と彼女は言つた。

「泡になつて消えてしまつよりも悲しい

叩きつけるように斜めの線を描く雨。吹きつける風は湿っぽく、煉瓦を云つ雨の甘い匂いが鼻についた。

「叶わない恋に指を咥えて老いて行くくらいなら、一瞬で消えてしまつた方がまし……だから、綺麗な終わり方に物語はしたんだと思う

「そう?」

彼女がどうしてこんな話を始めたのか、全く分からなかつた。僕は本当にこうこうとには鈍感で、彼女の気持ちにさえ気づこうとしなかつたから……いつになく真剣な瞳が上目に僕を見て、彼女の色みの薄れた唇が震えていたのに、僕はそのサインをずっと見逃していたのだ。

「他に好きな人が、人魚姫もできたか……」

だから、そう言いかけた瞬間、全部の時間が止まつてしまつたか

のまゝに思えた。

斜めに降つてくる雨も、バス停の屋根を打つ雨音も、風も、そして、僕らも。

だつて・・・。

七瀬が僕にキスをしていたから。

いつぱいに伸びをした彼女が、僕のジャケットを引っ張るようになづんで、冷たくなった唇を重ねる。湿っぽい七瀬の味とひんやりとした感触が喉をすべり、ただそれを意識した熱が鼓動を振動させる。

カツン・・・。

僕の頭一つ分小さい彼女は音を立てて踵を下ろすと、潤んだ瞳を銀色の睫毛で隠して、

「いめんなさい」と小さく言つた。

モノクロームの世界。取り残されたのは僕と七瀬。

さうして、今、まだ止んでくれそうになかった。

「「」めん・・・」

そう言つたときの彼女の瞳を、僕は一生忘れることはないと想ひ。ピクッと痙攣するように目じりが動いたかと思うと、今にも泣き出すんじやないかつてくらい、悲しい瞳が覗いたから。

でも、その悲しさはすぐに彼女の臉に隠されて、次に開いたときは、僕にも分つてしまつくらい、ギリギリのプライドで溢れていた。

「何で言えばよかつたんだよ」

ベッドに背中を預けて天井を見上げる。

田の前には、四角い真っ白な天井しかないのに、田に浮かぶのは七瀬の顔ばかりだった。あの瞬間の、傷ついた、どうしようもなく悲しそうな、今にも壊れてしまふんじやないかつてくらい揺れる瞳が鮮明に浮かんでくる。

「私、何やつてんだろう。今忘れて。皐月くんに好きな人いるの、聞いたばかりなのに」

彼女はそう言つと、いつものように笑つたつもりだったのだろう。でも、七瀬と一緒に時間を過ごしすぎていたのかも知れない。ほんの少しだけ彼女の声が震えているのに、僕は気づいてしまった。それは本当に、ギリギリのライン。

「じゃあ、また明日ね」

そう言つて彼女は雨の中へと、僕の返事も待たずに駆け出して行つた。いつもなら、一人の家の分かれ道まで一緒に、彼女はモノクロームの世界に飛び込んで、僕をバス停に置いて行つてしまつた。

小さな背中だった。

斜めに降る雨に打たれながら、黒いポニー・テールが揺れていた。そして、細い肩が震え、遠ざかっていく足音が雨音の中でやけに大きく響いていた。

僕はしばらく切つていらない髪を片手で掴み、無造作にひっぱる。ギシッとう音が背中からして、ベッドに軽く押し返された。

「もつと早く七瀬の気持ちに気づいていれば……」

その想いは、彼女の背中を追いかけることができない自分への後悔なのかもしれない。けれど、他に何ができるたつていうのだろう。今思つと彼女からのサインはいくらでもあつたのだけれど、僕は舞との関係に浮かれていたから、気づこうともしなかつた。

「へへへ

吐き出した溜息が、冷たい部屋の空氣に触れて白く立ち昇つている。そして、まるで僕の鈍さをあざ笑つよう、てつむへむつと一回転して、螢光灯の中に消えた。

「のどひつとした黒い感情は何だろ？？」

悔しがるうか？ 苛立ちだらうか？

でも、それは何に対しても？

僕の自問はとめどなく続き、僕自身を責め続ける。もつと卑く七瀬の気持ちに気づけていればと。

でも、果たして気づいていたからと言つて、僕は今の状況を回避できたのだろうか？ いや、それは無理だつたような気がする。分かつていても避けられないこともあるのだ。

「なら、どうしたらよかつたんだよ・・・」

じつやつて螺旋を描き続ける問い掛けが、また七瀬の後姿を思い出させ、僕は抜けられない不安定な感情から、苛立ちをまた一つ受け取つてしまつ。蛍光灯の明かりに向かつて手を伸ばし、その輪郭がぼんやりと赤みを帯びるのを見つめる。

七瀬は僕が好き。僕は舞が好き。舞は僕が好き。

だから、僕と舞は恋人で、僕と七瀬は友達だった。

でも、七瀬と僕は他人で、舞と僕は姉弟。それならば、本来恋人になるのが自然なのは七瀬なのだ。だからもし、舞と僕が出会つていなければ、僕は七瀬と付き合つていたかもしない。それは、誰にも責められず、隠さなくともいい普通の恋で、きっと七瀬はいい奴だから、それなりにうまく行つたかもしれない。

けれど、僕と舞は出会つてしまつた。

それは偶然だつたけれど、その偶然が、僕が彼女に恋をするという必然を作つてしまつた。それは避けられないことだ。

「考えていてもしょうがないな」

僕は上半身を起こすと、自分の膝を見る。

考えても仕方のないことを考え続けても、それは意味のないことだ。どうせ、彼女とは明日顔を合わせないといけないのだから、その時、成るようになるだろう。

『じゃあ、また明日ね』

そう言つた彼女の声が、聞こえたような気がした。

ところが、七瀬の言った『明日』はそれからなかなか訪れなかつた。なぜなら、僕と七瀬はあの日からしばらく顔を合わせることがなかつたから。お互いに故意に避けていたのではないと思う。でも、どこか心の端の方で、僕は彼女の顔を見る恐れていたのかもしれない、七瀬の方も同じだったのかもしれない。だから、その『明日』がやつてきたのは、本当に突然のことだった。

「あっ、臥月くん……おはよっ」

お昼がもう半分以上は過ぎていたから、『おはよっ』といつも「こんなにちは』だと思つたけれど、「うん、おはよっ」と、僕は彼女にうつむけ返事をした。

学内のちょうど三階と四階の間。中二階とでも言つた方がいいだろうか。そのちょうど階段と階段の間の小さなスペースで、僕らは突然に出くわしてしまつた。大きな窓から取り込まれる太陽が作つた長方形の光のタイルが、一人の影に切り抜かれるようにして灰色の床に浮かんでいた。

「元気、だつたかな?」

はにかむよひ、氣まずいこの雰囲気をどうにかしようと言葉を続けたのは、やっぱり彼女の方だつた。

「うん、まあ。……七瀬は?」

「うん、私も何とか元気……かな」

いくらかの沈黙が、少しだけやつれたような氣のする七瀬の表情に気付かせる。でも、僕はそれを無視して、「ならよかつた」と微笑した。

実際、自分でも、何がいいかなって分からなかつた。でも、僕はそう言う以外、他に言葉を持つていなかつたから、小さな声でそう言つたのだ。

階段を降りてきた何人かの生徒が、笑い合いながら僕らを避けていく。一人の女子生徒の陽気で甲高い笑い声に、何故だか苛立ちを感じた。

「あのね」と彼女は足元に視線を落として、「この間のことだけ、もつ忘れてくれないかな。皐月くんに好きな人がいたことは、知っていたしね。私も忘れるようにするから」と言つた。

陽だまりでできた光のタイル。その中で彼女の小柄な影が揺れる。

「それでいいの？」

「うん」

チラリと視線を僕に向けて、だつて、と彼女は呟く。

「この間のことと、この間の皐月くんと氣まずくて、いつもみたいに話も出来なくて……でも、それって嫌なの。自分からキス……しといで、こんなこと言つうのもアレだけど、前みたいに普通の女友達として仲良くしてくれないかな？」

見上げる瞳が僕を捕え、なんとなくそれが儚い物のような気がした。瞬きが繰り返されるたびに揺れる瞳が切なく思えて、そういう表情をさせてしまっているのが自分自身、と言つ事実に悲しくなる。

「きつと私はあなたの友達に戻れるから」

そう言つた彼女が、今にも泣きそうな小さな子供のよつに金色に輝く睫毛を揺らしたから、僕の心はよく分からぬ鈍い痛みに、キリキリと音を立て始めた。

「だから、私を恋人でなくともいいから・・・傍に居させてくれない？」

僕の目の前に立つ七瀬は、黒くて長いポーテールを冬の太陽に晒して、答えを待つている。

どうしてだらう？　彼女はどうして僕なんかを好きになつたのだろ？　氣さくで、話しやすくて、明るくて、優しくて、可愛くて、綺麗で。そんな彼女が僕を好きだと言つ。今まであまりに近くに居過ぎたせいで気付けなかつた七瀬の気持ち。彼女は隣を歩いて家に帰るとき、一緒に話をするとき、学食で騒ぐとき、ふざけ合つて笑う時、講義で田線を合わせるとき、どんな気持ちで七瀬はいたのだろ？

「嫌かな？」

沈黙に耐えかねた彼女がそう言つた。チラリと舞の顔が浮かんで、僕はそれに言い訳をするよつて、友達として付き合つだけだから、と言ひ聞かせる。

だつて、今までそうだつたのだから、別にやましいことをして

いることにほなならないだろ？

彼女は僕にとつて大事な友達で、舞は大事な恋人。七瀬もそれでいいと言つてゐるし、何も悪いことはない。だから、「分かつた。七瀬は今でも大事な友達だと思っているから……これからも今まで通り接するよ」と僕は言つた。

「うん、ありがとう

ホツとしたとでも言つよつて、コート越しに胸をなでおろした七瀬。なのに、浮かべた微笑は今にも消えてしまいそうに、引き攣つたままだつた。それは七瀬の精一杯の優しさだから、僕はわざと気付かないふりをする。

「それじゃ、私、次の講義があるから」

そう言つて右手を上げると、彼女は僕を追い越して太陽が作り出す光のタイルの端に消えた。日の光が届かない下への階段。彼女は一步一步ブーツを進ませ影の中に消えようとしていた。

「ねえ、臯月くん」

「何？」

「臯月くんつて、『誰にでも優しいのは、誰にも優しくないのと同じ』ってこと、分かつてる？」

「え？」

弾かれたように振り返る僕。階段を降りようと、次の段に足をか

けた格好の七瀬がまぶしそうに僕を仰いでいた。影に沈んでしまった表情は僕からは読み取れなくて、唯、その細められた瞳が猫のように輝いて見えた。

「なんでもない。今のも忘れて」

「でも・・・」

「聞こえてないならそれでいいの」

彼女はそう言つて長いポーテールを揺らしながら階段を下りて行つた。陽だまりのタイルに残されたのは僕の影。四角い窓から差し込む太陽の光を手のひらで遮つて、青い空を眺める。

「『誰にでも優しいのは、誰にも優しくないと同じ』かあ」

溜息が言葉の端と一緒に出て、七瀬の後姿を思い出す。僕は彼女の小さな背中にどれだけ助けられているのだろう。今回だつてそうだ。本来ならば、僕の方から声を掛けるべきだつたかもしれないのに、先に言葉を発したのは七瀬だつた。

もし、舞に振られたとして、僕は七瀬のように強張つた精一杯の笑みを浮かべて、友達として付き合う道を選ぶことができるだろうか？ たぶんそれは、心が引き裂かれてしまうほど残酷で悲しいことだらう。舞が僕に優しくする時も、怒る時も・・・誰かと恋に落ちる時も、別れる時も、いつだって自分が彼女に振られたんだつてことを考えてやつしていくなんて、考えただけでもゾッとするくらい辛いことだ。

しつかりと聞こえてしまつた彼女の残した言葉は、その辛さから

生まれる小さな復讐なのかも知れなかつた。

「人魚姫は、本当の運命の相手を見つけることができたと思つよ」

そう信じたかつた。

うぬぼれもいいことだと思つけれど、本当にそう思わずにはいら
れなかつた。きっと僕よりもいい男が彼女を幸せにしてくれて、あ
の引き攣つた笑みを懐かしく語れる日が来ると。

高い冬の空を見上げた僕は、いつまでも七瀬の眩しそうに細めら
れた瞳を忘れることができずにいた。

? memories (1)

皐月舞という女性は、客観的に見て、『魂のひどく美しい人』だった。容姿が美しい、雰囲気が優しい、声のトーンが柔らかい。要素としては色々あるかもしれないけれど、そのすべては要素でしかなく、舞と言う人物を評するのに相応しい言葉ではなかつた。だから、僕は彼女がどんな女性かと訊かれたら、そのどれでもなく、唯『魂のひどく美しい人』とだけ答えると思つ。

一度、舞に直接そう言つたら、キヨトンと瞳を丸くして、「それつてすゞしくキザなセリフね」と言われてしまった。

けれど、やつぱりお世辞や誇張を抜きにして、舞は『魂のひどく美しい人』なのだ。少なくとも僕はそう信じて疑わない。

「私は、あなたのこと愛していたのですか？」

「そうです」

「あなたも私のことを愛していた？」

「ええ」

座席の間の中央通り。くすんだ赤のタイルの敷き詰められた先に佇む彼女は愛らしい小さな顔を斜めに傾けて、僕の言葉を思案していた。

『僕と君は恋人でした』

そんなことを言わないといけない日が来るなんて、あの当時の僕は想像さえしなかったろう。唯、彼女が傍にいてくれれば幸せだったあの日。あれから、全てが夢だったのじゃないか、と思えるくらいの時間が流れてしまった。

「そうですか。でも、どうして私とあなたは姉弟なのに、恋人になつてしまつたのでしょうか?」

「それが運命だからだと思います

「運命?」

「そう。偶然が必然を呼び、必然が偶然を呼んでしまつた。そして、僕らは何度でも同じ選択をしたでしよう。人はそれを何と呼ぶのか知らないけれど・・・僕は運命だと思います」

「そうですか」彼女はその澄んだ瞳をステンドグラスの光に輝かせて、「確かに、私には記憶がないけれど、色々とあつたような気がします。悲しいことも、嬉しいことも、辛いことも、幸せに思えることも・・・本当に色々とあなたと経験したような気がします」と言った。

蠟燭の光が揺れる。チラチラと輝く光は静かで、音のないクリスマスの夜を一層静かな場所にしていた。その中に佇む僕と舞。彼女は真っ白なコートを着て、僕が知つているままの微笑をこぼす。

「何か、話を聞かせてくれませんか?」

「話？」

「さう、私たちのことを」

彼女は祭壇の土台にゆっくり腰を下ろすと、僕に隣を促した。どこか懐かしさを感じながら、その場所へと近づいて行く。

「ずいぶんと長くなってしまったけれど、いいのかな？」

形のいい瞳が瞬き、

「クリスマスの夜は長いですから」と微笑する。

「さう」

じゃあ、何から話そうか……。

僕はしばらくぶりに彼女の隣に腰を下して、その小さな微笑に応えた。

「君が、どんな人かと訊かれたら、きっと僕はこう答えると思つ……」

・

あの時のようにゆっくりと流れる穏やかな時間を感じながら、一人の話を君に聞かせよう。すべてを君が忘れてしまったとしても、僕は確りと憶えているから。決して楽しいばかりの日々ではなかつたけれど、それでも一人の物語には変わりないのだから。

「そう……、君は……」

「魂のひどく美しい人だった」

*
*
*
:
.
*
*
*

冬の夜。風のない、静かな夜。きっと世界に存在しているのは、僕と舞だけなんじゃないだろうかって思えるほど、優しくて寂しい夜。金色に輝く月が澄んだ光を投げて、星がそっと僕らを見ていた。

「智也？ 寒くない？」

そう言って、お互の間にあつたほんの数センチの隙間を埋める舞。僕は微笑を浮かべて、彼女の肩を抱き寄せた。

「ううしていれば寒くないよ。たぶん、ここがもっと寒い国だったとしても、舞といえば暖かいと思う」

「私も。たぶん智也と一緒にだつて一番居心地が良くなるような気がするから」

流れるように曲線を描いた髪を右耳に掛けながら、彼女はそう言って笑みを浮かべた。

どこにいてもお互いが傍にいれば、そこが一番心地の良い場所になる。そんなことを思える一人は、世界にそつ多くはないのかもしれない。だから、今、僕らがその完成された関係であることを感謝しないといけないし、大切にしないといけない。

隣を見ると、月の明かりで金色になつた睫毛を瞬かせながら、形の良い飴色の瞳が揺れていた。

「どうしたの？」

「そう僕は擦れたような小さな声で訊く。

「智也はどこか行きたいといひてある?」

「行きたいといひて。」

毛布を胸に抱き寄せると微かな衣擦れの音がして、彼女の少しだけ湿った髪からシャンプーの甘い香りがした。

「寒い国、温かい国、海に囲まれた国、山の多い国、古い国、新しい国・・・。いろんな国が世界にはあるけれど、どこか行ってみたいといひはある?」

指を一つ一つ折りながらそつ舞は言った。

「舞と一緒になら、どこでも楽しい気がするけれど・・・やっぱり海の綺麗な国がいいな」

「そつか。智也は海、好きだもんね」

「うん。舞は?」

楽しそうに瞳を瞬かせて、彼女は頭を僕の肩に載せた。

「私は自然の綺麗な国かな」

「アイスランドとか?」

「あんまり寒い処も困るけれど、空気が澄んでいて、空が青くて、

食べ物がおいしくて、住んでいる人が優しい国に行きたい

「結構贅沢だね」

僕の感想に声を上げて喜ぶ舞。

「要望は多い方が楽しいじゃない」

嬉しそうな笑い声が狭い部屋に広がっていく。そして、僕もそんな舞につられて、なんだか楽しくなってしまつ。

一つしかない窓の外。一見すると、壁に飾った一枚の絵画にも見える長方形に切り取られた外の世界。そこから、淡い雲をまといながらも、澄んだ光が優しくこの場所に差し込んでくる。田を凝らして見ると、月の周囲だけ空が色を変えているような気がする。ぼんやりと、何色かは分からなけれど・・・。

「世界には、私たちだけ・・・」

外の景色に見とれていると、ポツリと、舞がそう言つた。

「なんだかこうじてみると、世界の終りの田みたいに思えてこない？」

だつて、と彼女は続けた。

「外は真っ暗で、物音もしないし、誰の声も聞こえない。あるのは智也と一緒にいるこの部屋だけ。だから他の全てがなくなつていたとしても私達は気付かないかもしない」

「舞は不思議なことを考えるよね」

「やつ?」

白い横顔が窓の外を見つめていた。僕は彼女の視線を追うようにして、目を凝らして見るけれども、一体彼女が何を見ているのかは分からなかつた。だつて、きっと彼女はそこにはないものを見ていたのだろうから。

「もし」と舞は言った。「もし、神様がいるのなら、こんな汚い世界は滅ぼしてしまいたいと思ってるはずだわ。そして、もつと優しくて他人の痛みを分かつてあげられる人ばかりが生活する世界を作りたいと思っているの」

「そうかもしれないね」

僕は小さく同意する。

「死ぬことも、病気になることも、怪我をすることもない。そして、心を傷つけられない世界。そうすれば、誰も泣かなくていいし、温かく笑つて暮らせるかもしれない」

「そんな世界があつたら、舞は行きたいの?」

「分からぬわ」

だつて、そんな世界は知らないもの。

その時の舞の横顔はとつても綺麗だつた。凛とした強さと哀しい弱さが同時に存在していて、どこかを見つめる視線は真剣で柔らか

つた。たぶん、彼女が神様だったら、誰もが傷つくなとのない温かくて優しい世界を作るのだろう。でも、

「私には智也がいるから」舞は月の澄んだ光を浴びながら、「だから、ここが私のいるべき場所なの。他のどこでもないここが、私のいるべき場所」と言つた。

「うん。そうだね」

たとえ、天国があつたとしても、樂園があつたとしても、二人のうちどちらかが欠けてしまうなら、そこは僕らのいるべき場所ではない。

舞が体の向きを変え、その拍子にヒンヤリとした冷たい空気が毛布の中に流れてくる。回された腕に彼女の温もりが感じられ、僕らはお互いがお互いを温めるように体を寄せ合つた。舞が僕の腕を心細そつにギュッと抱き、その拍子に彼女の髪が、着ていたシャツ越しに、胸のあたりに流れ込んできた。

「月はずっと私たち人を見てきたのね」

「うん。そうだね」

「色々な国を、時代を、人を見てきて……」んなに汚れてしまつた世界をどう思つているのかしら？」

いつも何も言わず、唯、夜が完全な闇に呑みこまれないように照らし続けてくれる月。時には泣きながら、笑いながら、怒りながら、真剣に、冗談交じりに月に向かって願いをし、相談をし、心の内を語つてきたのだろう。その度にこの静かな夜の母は、その静寂

ゆえに多くの言葉を受け止めてきたのだらうか。

そう考えると、何だか哀しくも優しい気持ちになる。

「きっと僕らみたいに、秘密の関係を続ける恋人達も、見てきたのだろうね」と僕は言った。

舞は小さく頷くと、

「そうね」とだけ言つて窓の外を見ている。

たぶん、舞は僕にとつて月のような存在だと思つ。夜のよつ、暗い悲觀的な世界にあつて、心地の良い慎み深い月明かりのようにそつと包んでくれる。どんな時も彼女の傍にいれば、僕は落ち着いていられた。そして、これからどうすればいいのか、どこに行けばいいのか気付かせてくれる。舞はそういう存在だ。

「たぶん、僕は舞に相応しくないのかもしれない」

そうポツリと言葉が零れた。とても自然に、違和感なく。

「そんなこと……」

眉を寄せて何かを言おうとした舞の薄い唇に人差し指を当てて、「分かつて。それでも僕は舞から離れるつもりはないし、離す気もないよ。ただ、やっぱり僕はまだまだ舞に相応しい人になれるよう頑張らなくちゃいけないね。もっと、舞が頼れるような大人な男にならなくちゃいけない」

だつて、と僕は続ける。

「月だつて、傍には星が輝いているだろ？ きっと月が多くの心を受け止めてきたのと同じように、星が月の心を受け止めてきたんだと思う。だから僕は、舞にとつて星のようにしていつも傍にいて支えられる人にならなくちゃいけないと思うんだ」

「今でも十分だと思うわ」

僕は彼女の瞳をまっすぐ見つめて、「これからもずっと、舞からそう言つてもうれるために」と笑つた。

小さくクシュッと微笑してそれに応えてくれる舞。

今僕にはその笑顔があれば何だつてできる気がした。将来なんて不確かだと言うけれど、僕にとつてずっと舞と一緒にいることは変わることのない未来で、その未来を得るために払う努力が何であつても、少しも惜しむことはないのだ。この先ずっと、舞が僕を愛してくれるのなら。

そう、死が一人を分かつまで・・・。

カタカタと夜を切り取った窓が揺らされ、屋根越しに勢いよく風が通つたのが分かつた。僕は胸を流れる艶やかな栗色の髪を指先ですくつて、

「今度、旅行に行つてみない？」と訊いた。

「旅行？」と舞が首を回して僕を見る。

「日帰りでもいいからさ。誰にも遠慮する必要のない処に、舞の好きな自然を楽しみに一人で行かない？」

長い睫毛が何回か瞬いて、飴色の瞳が嬉しそうに揺れる。

「智也と一緒に旅行かあ。 . . . いつにする?」

「今度の週末にでも早速。場所は僕がいくつか候補を挙げておくから。 . . . 」

「それははとつても楽しみね」

そう言って微笑する。

カタカタと窓ガラスが冷たい風に揺れ、どこからか葉のざわつく音が微かに聞こえてくる。狭い部屋には僕と舞。きっと世界は滅びてしまつて僕ら一人だけしかいないのかも知れない。そう思つてしまつほど静かな世界で僕は彼女に応えて微笑する。

絵画のように切り取られた夜の景色が、薄い光で僕らを見守つていることを感じながら。

何でもないことが気になつて眠ることのできない夜。妙に冴えてしまつた瞳をなごり惜しくこすりながら、そつとベッドを抜け出した。初めはトイレにでも行つて、また眠る努力をしようかと考えていたのだけれど、静まり返つたリビングに足を踏み入れたとたん、なんだか寝るのがもつたいくなと思つてしまつた。

色のない、モノクロームの世界。

ひつそりと息を潜めているかのよう、自分の発する衣擦れの音と微かな呼気の音が響いていた。

そして、そつと差し込んでくる月の光。

いつもと違う、見慣れているはずの自分の家が、じつと僕を見つめている。そう感じた瞬間に、心臓がギュッと締め付けられるような心地のよい痛みを発し、それに促されるように僕は急いで部屋に戻つていた。

白いシーツの中で、寝息を立てる舞。

彼女を視界の端に捉えながら、できるだけ音を立てないようにジーパンに足を通し、ジャケットを羽織る。

ドアを閉めるときは出来るだけそつと、そつと・・・。

こうして、夜の街に足を踏み入れた僕は冷たい外気に上気した頬を晒して、ふと、視線を上にあげることに気付いた。

「意外と明るいんだ」

とたんに白い吐息がクルリと月光の中を踊り、後形もなく消えてしまった。街灯の少ない家の近所は真っ暗だと思いきや、意外なほど明るくて、それに今まで気付かなかつたことが本当に不思議なほど、辺りは優しい光で照らされていたのだ。なんだかそれに気付いたことが嬉しく思えて、幾分軽い足取りでスニーカーを進め始める。

時折、蛍光灯の明かりに照らされた自販機や、西洋の趣向を凝らした街灯があつたけれども、ほとんど、光という光は月と星だけだった。

なんて、特別な夜なんだろう。

そう感じずにはいられない。

途中、あつたかい飲み物で体を温めようと、自販機のボタンを押したら、あまりに大きな音を立てて缶が落ちてきたから、僕はその不躾な音にこの夜の街が目を覚ましてしまうんじゃないかなって気にさえなつた。

そんな、本当に静かで優しい夜。こういう時間が自分のすぐそばにあることを知らなかつたことが、なんだか損をしていたような気さえしてしまつ。

大きくて丸い月を眺めながら、目的もなく、なんとなく気の向くままに足を進め続けた。それは、見慣れた街が別のものに変わつたような感覚。絵本の中の一ページのように、不思議で、ちょっとだけ物悲しく、でもわくわくしてしまつむづなおとぎの国だった。

そやつでどこに行くでもなく進めていた足は、いつの間にか海岸に向かっていて、気付くと潮の香りが辺りに満ちていた。時刻は真夜中。朝の太陽が顔を見せるにはまだ早すぎる時間だ。

防波堤の隙間に作られた階段に腰をおろして、唯、潮の香りと波の音が聞こえるだけの真っ黒な海を見つめることにした。水平線に大きな月が、どこまでも続く光の道を一筋、闇に沈んだ海につくりだしている。風はほとんどなく、人もなく、物もなく……。目の前にあるのは穏やかに屈ぐ海水の満ち引きの気配。

そうしていると、けよつと・・・あの日もこんな海を舞と一緒に眺めていたと、ふと田の前の景色が記憶の深い処を探り出した。もう、ずいぶんと昔のことのような気もするし、つい昨日のような気もする。あれは僕と舞が『恋人』という関係になった日のことだ。

過去の記憶は『二年前』。

始まりは僕が高校一年、舞が二年の記憶。

あの頃、皐月智也と舞は血の繋がっていないことと、その為に普通の姉弟よりも幾分仲の良いことを除けば、いたって一般的な『家族』という言葉で表現される関係だった。それが変わってしまったのは、果たして僕らにとつて良かつたのか、悪かつたのか、正直、素直にそれを喜んでいいのか、きつかけになったことを思うと今でも迷っている。

当時、バスケ部に入っていた僕は、冬の大きな大会を間近に控えていた為に、毎日遅くまで練習していた。まあ、三年の引退試合と

言つことなので、彼らのペリペリしたムードを受けて僕、「一年生も付き合わされていたと言つたところだろ。とにかく、僕は家に帰るのがこの時期は遅かった、ということだ。

もう、すっかり暗くなつた道をジャケットに両手を突つ込んだ格好のまま、マフラーに顔半分を埋めて足早に家へと急いでいた。今でも憶えているのは、煉瓦で造られた歩道を照らす街灯の一つがチカチカと消えかかっていて、その下にチェック柄の赤いハンカチが落ちていたことだ。誰かに踏まれたのかもしれないそのハンカチは汚れていて、もう一度と持主の手元に戻ることがないとすれば、それはそれで可哀想なものだと、練習で疲れていた僕は何気なく思つたのだった。

家へ帰ると、いつものように晩御飯の匂いが玄関まで香つていて、練習でお腹を空かせていた僕はすぐにリビングに向かつた。

蛍光灯の明かりと、鍋から洩れる白い蒸氣。

テーブルには何も入つていない食器が料理を待つていて、僕は空腹を感じながら姉さんを探した。

「姉さん？」

返事がないことを訝しがりながら、カウンターキッチンの中に入つた僕は、そこに舞の姿を見つけて驚いた。

「姉さん・・・ん」

床にあおむけに倒れている舞の苦しそうに閉じられた瞳。病的なまでに青白くなつた頬と、苦痛のためにかいだ汗で前髪がべつたり

と張り付いた額。僕が慌てて抱き起すと、彼女の色の薄くなつた唇からは微かな呻き声が洩れた。

「姉さん、しつかりしろよー！」

いつもの夕方。いつものリビング。いつもの食事。それらは本当にいつも通りの姿でこの場所にあつたのに、舞だけがいつもと違つていた。

「姉さん！」

体の奥深くを冷めた汗が伝つていく不快な感触。それはまだ何が起つたかしつかりと理解できていないのに、本能的に絶望を感じ取つた瞬間だつた。

姉さんが壊れてしまつた。

そう僕はひとたまつた。

脳裏に浮かんだのは、道路に打ち捨てられたハンカチ。どうしてか、姉さんとそれが重なつて、僕は自分でもよく分からぬ焦りを感じた。きっと、舞が二度と持ち主のもとに戻らないハンカチのよう、僕の傍から消えてしまうんじゃないか、そう思ったから。ちようど、心の半分が枯れてしまつたような、気持ちの悪いアンバランスな状態の中、真っ白になつていく頭の隅で、妙にはやる鼓動が煩かつた。

それからどうしたのかは正直憶えていない。なんだか靄がかかつたようにボンヤリとしていて、曖昧で断片的な記憶があるだけだつ

た。気がつけば、慌てて会社から駆けつけてきた両親と一緒に、大きな縁の眼鏡をかけた医者から説明を受けていた。

彼は何の感情も読み取れない瞳で姉さんの病状を簡単に説明し終えると、「とりあえず、今のところすぐに命がどうりどうり」という問題ではないのですが」と言葉を切った。

消毒液の匂いで息が詰まりそうだった。

彼の説明によれば、舞は心臓に先天性の欠陥があるそうだ。あまり詳しい内容は分からなかつたけれど、心臓内にある心室同士が繋がつてしまつている。だから、静脈と動脈が混ざつてしまつて、正常な血液を全身に送ることができない。そんなところだつたと思う。

隣で両手を胸の前で組んでいた父が、何度も大きく喉を鳴らしたのが分かつた。

「ですが、もともとお嬢さんは体力のある方ではないようですね。それに心臓自体の力がそれほど強くない。手術をして、右と左の心室を正常に分けることはできますが、負荷がかなりかかるので、術後の生活はかなり限られたものになるでしょう」

医者は無機質な瞳で僕をとらえ、「それに」と言った。「頻度は定かではありませんが、今回だけでなく、何度も手術を繰り返す必要もあります」

彼がレントゲンをライトに掲げ、白衣のポケットに刺していたペンで説明を続ける。僕にはその話のほとんどが耳に入つてこなかつた。ここにいない姉さんのためにも、代わりにしつかり聞いておかなければならぬことは分かつていた。けれど、頭が真っ白になつ

て、何も考えられなくて、唯、大変なことになってしまったという焦りだけがグルグルと螺旋を描いていた。

「一緒に頑張つていきましょ」

涙ぐんでいる母さんに医者が淡々とした口調でそう言った。

彼にとつては仕事の一部で、日常で、慣れてしまったことなのかもしれない。姉さんよりも、もつと重篤な患者をたくさん診て、たくさんのお死を知っているのかもしれない。だから、彼は何事もなかつたように平然と話ができるのだろう。けれど、僕には黒い大きな縁の奥にある無機質な瞳がどうしても好きになれなかつた。姉さんがこんなことになつているといつに、この医者は何とも思わないのだろうか。そんな身勝手な考えと、姉さんが倒れるまで気付くことができなかつた自分自身への苛立ちが、消毒液の匂いの充満する狭い部屋の中で募つっていく。

一年前の冬の始まり。

優しくて、綺麗で、憧れだつた姉さんが初めて倒れた。

しっかりと握りしめた右の拳。僕はライトで照らされた舞の心臓を睨みながら、雪のようにゆっくりと、でも確かに積もつていく苛立ちをどうする「ともできなかつた。

? memories (3) (後書き)

感想等いただけますと、非常に励みになります。

ランキング参加中です。 バナーのクリック、お願いします。

そこは灰色の場所だった。彩色的には白のだろうが、たぶん訪れるほとんどの人にとってはそうでないとと思う。特に患者の家族とか恋人とか友人とか、関係が近ければ近いほど、親しければ親しいほど、この場所は憂鬱で印象はくすんでしまつのだ。だから、ベッドから身を起して窓の外を眺める姉さんを見たとき、僕は彼女がこの灰色の空間に押しつぶされてしまふんじゃないかって不安になつた。

「気分はどう?」

「ここは個室だつたけれど、何かに遠慮するようになつた小さな声でそう言つた。もしかしたら、病院といつ環境がそつとせるのかもしない。

「そうね。悪くはないわ。痛みも我慢できないほどではないし。とりあえず大丈夫」「

そう言つて微笑んで見せる姉さんは少し痩せてしまつたように思える。もともと細い方だった彼女は、ここ数カ月で一回りほど小さくなつたし、透き通つた白い肌には静脈が浮かんで、なんだか存在自体が儚かつた。

「もう言えば、もうすぐ智也くんは三年生になるのね」と姉さんは言つた。「私はこの調子だと進学できそうにないけれど、智也くんはちゃんと進学するのでしょうか。この一年間は勉強で忙しくなるわね」

「そりゃもね。まだ部活もあるし、勉強とか、進学とかはそれから考えるけれど」

「そっか。バスケットも頑張らないといけなかつたね」

そう言って、姉さんはまた優しく笑う。いつもの、僕の知つている温かくて柔らかい瞳で笑うのだ。

昔から彼女はそだつた。自分がどんなに忙しい時でも、大変な時でも、他人の心配ばかりして。体力だつてそんなにある方じやないのに無理ばかりする。そんなんだから、彼女の小さくて弱い心臓は壊れてしまったのかもしね。

一回目の手術。

先天性の疾患と言つても、もともとそれほど大きな欠陥ではなかつたのに、それは歳を追うごとに肥大していき、ついに彼女の体は悲鳴を上げた。倒れてからすぐに手術を行い、それから数カ月後の一昨日、二回目の手術が終わつたばかり。一度もこの小さくて細い体にメスが入つたのかと思うと、僕はぞつとする。

窓の外では終わりかけの冬が僕らを見ていた。薄く伸びた白く濁つた雲が傾きかけた空を背景に、冷たい風に流されている。

「やっぱり、また手術をしないといけないのかな？」

細い指をシーツの上で組んだ姉さんは、消え入りそうな声でポツリと、そう訊いた。僕は喉が急に干上がつてしまつて、何度も口を開きかけて、でも言葉を発することはできなかつた。

だつて、何と言えばいい？

一回も辛い思いを経験して、またこれからも永延とそれを続けなければならない。そんなことを目の前の、今にも壊れそうな女に言えるだろうか？

そう困り果てている僕を見て、「ありがとうね」と姉さんは言った。

「どうして？」

「だって、智也くん一所懸命私のことを考えててくれているでしょう？」

「・・・」

その大きな飴色の瞳で僕をとらえた彼女は、「優しいね、智也くんは」と微笑した。

彼女だって分かっているのだ。自分の体のことだ、周りがいくら元気づけたって気付いてしまうのだろう。それでも訊かずにはいられない。そんな心境は僕にでも何となく分かる。

十年・・・なるべく心臓に負荷を掛けないように極力注意をしながら生活して、手術を何度も成功させて・・・。

姉さんの担当になつたあの眼鏡の医者は、彼女のいない時に僕に声を掛けるとそう言った。

「僕もできる限り努力はするけれど、こればかりは本人次第と言つたところだろうね。ベストの状態が維持できたとして、十年が彼女

の心臓にとつて限界だと思つ

「十年・・・」

それはあまりに突然で短過ぎる宣告だつた。

残りの人生が後『十年』。しかも、それは運が良ければと言つことらしい。彼は大きな眼鏡の縁を指先で整えると、

「君が彼女を支えてあげないといけないよ」と言つて踵を返した。

消毒液の匂いのしみついた白衣を見送りながら、僕は病院の薄暗い廊下の端で動くことができなかつた。

姉さんが何をした？

そう思つた。

何かをしたからこんな状態になつたのか？ どうして姉さんのか？ いつだつて優しくて温かで穏やかで、そんな彼女がどんな理由があると言うので、こんなに苦しい思いをしないといけないのだろうか？ ただ、皆と同じように進学して、就職して。そのうち、あの家を出でいくのかもしれない。きっと姉さんが誰かと付き合つようになれば、僕は相手がどんな奴なのか見定めてやろうとか思つて、でもきっと彼女なら素敵な男を連れてくるに決まつていて。そして、お互に結婚して、それぞれの家庭を持つて、歳をとつて。そう言つ当り前の生活を彼女は慎ましく望んでいただけじゃないのか。

病はあまりにも理不尽だ。

だつて姉さんから全てを奪つてしまつたのだから。『未来』という名の当り前の時間を消し去つてしまつたのだから。

「智也くん？ どうしたの？ 怖い顔をして・・・」

僕の顔を覗き込むよつにして、斜めに小首を傾げる姉さん。

「眉毛がこんなによつて。すりぐれ怖い顔」

大袈裟に大きな瞳をさらに大きくして、彼女は僕にそう言つた。

「ああ、今度の練習試合のことを考えていたら自然とね」

「そつなの？ やつぱり相手は強いの？」

「まあね」

両肩を上げて僕はおどけて見せる。

「僕がいるから絶対に負けはしないけどね」

「すうじい自信・・・」

自分の長い髪を指先に絡ませながら、姉さんが笑う。本当は部活のことなんか少しも考へてる余裕はなかつたけれど、「当然」と僕は笑つた。

灰色のカーテン、灰色のシーツ、灰色の壁。くすんだ重たい部屋の中で僕らは小さく声を上げて笑う。そうやって彼女が少しでも心から笑えているなら、僕は道化にも躊躇いなくなるだろう。例えそ

れがほんの少しの時間に過ぎなくても、全くないよりはましだらうから。だから、僕らはくだらない話をいくらでもした。最近のテレビで見たドキュメンタリー。面白かった小説、美味しいかった料理、新しくできたお店、学校での噂話。話題は何でも良かつたし、だから呟きることはなかつた。どうでも良いようなことでも姉さんは時に真剣に、楽しそうに、懐かしそうに聞いてくれたから、僕は遠慮なく話をした。要は、話 자체がどうより、一緒に話をしていると、いうことが大事だったから。

言葉の隙間に落とされる相槌。何気ない微笑。

少しでも彼女が僕を求めるのなら、家族として、弟として、それに応えてあげたかった。もしかしたら、実際に血が繋がっていないからこそ、その絆を一層意識するのかもしれない。

「いつもありがとうね」

ふと、会話が途切れた時に、彼女がそう言った。

「智也くんが来てくれるおかげで、私はその間病気のことを考えないでいられるの。そうは言つても痛みがなくなるわけじゃないのだけれど、それでも一人でいる時よりも、ずっと・・・」

姉さんの肩越しに夕日が差し込んで、灰色の病室がこの時だけは真っ赤に燃えあがる。ほんの少しの間だけ色のない世界から解放される瞬間だった。

「いいんだ。僕は姉さんの弟だから」

夕陽の輝きに瞳を細めて、ちゅうぶん影になつた彼女に向かつて言

つた。

「たぶん、『もう来なくていい』って言われても、僕は姉さんが気になつて仕方ないと思つ。それなり、いつせつて顔を見て安心していた方が、よっぽど安心なのためだと思つよ」

「やつかり？」

「あつと、やつだよ」と僕は頷く。

それに合わせて微笑する舞。表情のほとどきは逆光のせいで分からなかつたけれど、彼女がいつも優しい瞳で僕を見ていることを意識する。

「なら、明日も明後日も、ずっとずっと、智也くんが来れるときなお見舞いに来てください」

「うそ、了解

できるだけ気軽に、彼女に気にさせなことにつく僕は明るく返事を返す。こんなときだつて誰かに頼るのを遠慮してしまつのは、姉さんの悪い癖だと思つから。

「なら、僕はそろそろ帰るよ。面会時間も終わるし

「やつね

ベッドから出よつた姉さんを押しとじめて、僕は素早く荷物を手にすると廊下に出る。

「また明日来るから」と僕は言った。

「無理はしないで」

「うん」

この狭い病室に姉さんを一人残すのは、何度経験しても慣れなかつた。でも、灰色の病室が色彩を帯びているこの夕暮れ時なら、少しはましかもしれない。それは単に僕の自己満足かもしれないけれど、やっぱり色のない病室で見送る彼女を見ると、今にも消えてしまうんじゃないかなって不安になるから。

真っ赤な部屋。金色に輝く髪。影になつて見えないけれど、きっと僕を見る瞳は優しくて……。

閉まつていく病室の重たい扉。だんだんと遮られしていく視界に、ちょっとだけ寂しさを僕は感じて、小さく手を上げると左右に揺らして見せた。その時、扉の閉まるほんの一瞬のことだつたけれど、ベッドから体だけ起こした姉さんが素早く唇を動かしたのが僕には分かつた。

その言葉はきっと僕の勘違い。

間違つても彼女がそんなことを言つわけがない。

でも、僕には姉さんの薄い唇が夕陽の中でこうちぎったように見えたのだ。

『A・I・S H I・T E・R U』と。

パタソと音を立てて閉まつた扉の前で、僕の心臓は大きく跳ね上

が
つ
た

視界全てに入つてくる空に遠近感はなく、すぐそこにあるような気もするし、でも、とてもなく遠くにあるような気もした。目の前を薄い霧の雲がゆっくりと流れ、まるで時間の流れが穏やかになつてしまつたようで、のんびりとした怠惰な感覚に僕はあくびを噛み殺す。

風一つない静かな昼下がり。枕代わりにしている厚めの文庫本とコンクリートに思いつきり投げ出した手足。大学の屋上にやつてきた僕は何をするでもなく、唯こつして、一人でぼんやりと空を眺めていた。

ゆつくつと右手を空に翳して見る。

そこには届かずで届かない、有るのか無いのかさえ分からぬ、魅力的なのに当たり前な青が流れているから不思議だ。本当に空はあるのだろうか？　ふと、そんなことを考えてしまう。

「流石に徹夜はきついな・・・」

今感じている時間のように間延びした口調でそう言つと、ぼくは再度込み上げてきた欠伸を思う存分して、浮かんできた涙に瞬きを繰り返した。頭の中は靄がかかつたように思考が朦朧としていて、なんだか一気に歳を取つてしまつたように全てが億劫で仕方ない。

昨日の夜。いや、正確には今朝か。

じつはそり家を抜け出した僕は海に出て、眠れない一晩を明かした

のだ。なんとなく静かな海を眺めていたら、舞との思い出が込み上げてきて感傷にすっかり浸つてしまつた。気がついたらあたりが白み始めて、氣だるい体と妙に冴えてしまつた頭が家に戻つても眠らせてはくれないまま……。

「やつぱり、今日はサボつた方が良かつたかもしれないなあ」「

そもそも、こんな寝不足の状態で学校に来たつて、折角の講義が欠片も頭になんて入つて氣やしないのだ。もともとそんなに真剣に日頃から講義を取つているわけではないけれど、それでもこんな状態ならなおさらだと思つ。

でも、本当はそんなこと……僕にはできない。だつて、舞はこうして大学に来れないから。

実のところ、彼女はほとんど外に出ることもない。唯、あの家中で静かに大人しく生活しているのだ。ひたすら自分の壊れかけの心臓にこれ以上負担をかけないように生活している。だから、たまに体調がいい時、僕は出来るだけ舞を外の世界に連れ出すようにしている。

そこにあるのは当たり前のこと。ありふれた景色。

けれど、舞にとつてはいつだって懐かしさと憧れと苛立ちの詰まつた特別な世界。

だから、僕は彼女の経験することのできない特別を、彼女の代わりにできるだけ経験しなければいけなかつた。それを舞が望んでいたから。

『一人で一つなのよ』

舞はそう言って、自分の傍から離れようとしない僕を日常へと押し出した。たぶんそうしてくれなかつたら、一秒でも限りのある一人の時間を過ごしたいと望んで、僕は外に出ようとしなかつただろ。だから、舞は言ったのだ。

「私は智也をダメにするために好きになつたんぢやないの。唯、寄り掛かっているのが心地いから好きになつたんぢやないのよ」

いつになく真剣な瞳をした舞は、僕よりもずっと大人びた口調で、「だから、智也は普通の生活をして。私にとって、特別になつてしまつた生活を・・・。だつて、私たちは一人で一つになつたのだから。私のできないことは、智也がしてくれないと」と言つて笑つた。

だからこそ、僕は彼女のいけなかつた大学という日常を、放棄するわけにはいかなかつたのだ。

「それにしても・・・眠たい」

溜息に似た言葉が漏れて、どこまでも穢やかな空が眩しい。

もしここが固いコンクリートじゃなくてベッドの上なら、今この瞬間にも眠れるのに・・・。そう思いながら、もう一度手足を思いつきり伸ばして、僕は大きな空を独り占めした。

考えてみれば彼女の日常が失われなかつたなら、僕らは姉弟という関係のままだつのかもしれない。こうして眠たい目を擦りながら講義に出ることもなかつたし、彼女だつて自分の好きな時に好きな処に出かけて、思つままに生活できたはずだ。

失われた普通の生活。そして、生まれた僕らの恋。

僕は誰かを愛することがこんなに悲しくて、素晴らしい、残酷で、幸福なことだったなんて知らなかつた。もつと淡くて切ない、映画とかドラマとか小説とかみたいなものが恋愛なんだとずっと思つていたのに、現実はとってもひどいものだつた。

舞を本当に愛しているのに、でも、それが彼女の不幸の上に成り立つてゐることを意識しなければならないなんて。本当にひどいことだ。

だから、僕は奇跡も神も信じることはない。そいつらは何もしてくれないから。

ほとんど睡眠へと落ちかけている思考の中で、微かに開いた瞼の隙間から空の青を眺める。

脛下がりの屋上。風一つない静かで温かい冬の日。

思い出すのは舞からの秘密のメッセージ。僕だけに向けられた、彼女を一人の女性として意識させた決定的な言葉。

『A・I・S H I・T E・R U』

あの時に感じた死んでしまうくらいの胸の高鳴りは、今にも先にもあの瞬間だけだつた。あの時、音のない夕陽に彩られた病室で、舞の唇が僕に向かって五つの形を作つた。それは魔法のように一瞬で僕の心を虜にしてしまつた。たぶん、その前から彼女に恋をし始めたのだと思つけれど、きっと本当にその気持ちを意識したの

はあの時が最初だった。

しつかりと閉じられた病室の扉の前に立つて、僕は暫く動くこともできなかつたのを覚えてる。後でよく考えれば『アイシテル』ではなく『アリガトウ』だ。だって、お見舞いに来た人間を見送る言葉は普通そだから。

けれど、一瞬の隙をついて掛けられた魔法に動搖して、僕はぜんまいの切れた人形のように茫然と立つ立つてたかと思うと、看護師の注意を耳にしながらも、突然あらん限りの速さで病院を駆け出したのだ。

それは幸せで残酷な勘違い。

舞に恋する僕の心をほんの少し押してくれた、おかしな瞬間だった。

もう、すっかり日が暮れてしまつてたから、肺が破裂しそうなくらい悲鳴を上げて肩を鳴らしながら立ち止まつたそこは明りが点いていた。

規則正しい間隔で並んだ街灯。

その切れ目にそれは在つた。

小さな、でも綺麗に整えられてるそれは、街の一番見晴らしいのいい高台にある教会。微かに瞬き始めた星が、煙突のよつに空に突き出した鐘楼の傍に、二つほどあつたのを覚えてる。

何と言つか、この時の僕は色々と一杯いっぱいだつたのだと思つ。

混乱していたと、言つべきだらうか？ いつもは目もくれない人の気配のないその場所に吸い込まれるようにして、重たくなった足を伸ばしたのだ。

「コツン……。

金具の軋む音をさせて木製の扉を開けると、思つていたよりもずっと広い部屋に足音が反響した。きっと吹き抜けの天井がそうさせるのかかもしれない。蠟燭の明かりで照らされる長椅子。今は祭壇の横で沈黙を守つている大きなパイプオルガン。そして、僕の視線を釘付けにしたのは、七色のステンドグラスで造られた神秘的な場面だった。

赤、橙、黄、緑、青、藍、紫が背中から差し込んでくる月明かりを透過して僕の視界を彩つっていた。そこに描かれているのは三人。女と赤子と翼を持つ男。僕はクリスチャンじゃないから、その絵がどんな意味を持っているのか分らなかつたけれど、唯、その美しくて神秘的な場面に息を呑んだ。

たぶん莊厳つて言葉はこいつつ物のことを指すのだらう。

ひんやりと夜の湿氣を含んだ空氣を感じながら、音をなるべく立てないようにそつとスーケーを進めて、祭壇の前の席に腰を下ろした。ジーンズ越しに伝わつてくる冷たい椅子の感触を意識しながら、僕はさつきまでの動搖が嘘みたいに静かな気持ちでそのステンドグラスを見る。

まだ幼い赤子の無垢なガラスの瞳。

何秒か、何分か、何時間が、時の感覚がなくなつてしまつよう

気がするほど、唯、静かに僕は見つめる。

そして、風がひときわ大きな音を立てて建物の外を通り過ぎるのを聞きながら、

「たぶん……」と言つた。

「神なんて一生信じることなんてないと思つ。この世に奇跡なんてないし、有つたとしてもそれは偶然と必然が重なつて起きたことだつて思う」

誰に話しているわけでもない、唯、独り言を漏らすように僕は言葉を紡いだ。

「でも、姉さんに……舞に与えられた運命が、こんなにも理不尽なものなら、僕は彼女がその運命に押しつぶされないように奇跡を願つてしまつ」

だつて、と僕は続けた。

「こんなにも僕は無力だから。だから、もし、神つて存在がいるのなら、助けてくれませんか？」

応える者のいない問い掛けが、高い天井に反響して何度も僕に訊ね直す。一時の静寂を感じ、何の答えのないことを確かめて、「けれど、もし……いないなら。僕が彼女を守つて、支えていく。僕は弟に過ぎないけれど、舞が好きだから。そして、彼女も僕を好きでいてくれるから」と言つた。

それは甘くて切ない勘違いだつたけれど、魔法にかかっていたから、何の躊躇いもなかつた。

睨みつけるように七色に輝く三人を見る。たぶん、こんなに真剣に何かを言つたことは、今までなかつたと思う。誰も答える者がないことは分かつていたし、答えを期待してもいなかつたけれど、そういう宣言することですっかり混乱していた自分の気持ちを理解することができたのだと思う。

僕は姉さんに恋してる。

ただ、それだけのこと。でも、これほど重要なことはないと思う。

この先、彼女はきっと今よりも辛い状態になつていくだろう。もつと悔く、もつと苦しく、もつと孤独に。そんな中で、僕なんかにできることがどれだけあるのか、そもそも出来ることが一つでもあるのかさえ分からぬ。でも、彼女が本当にその苦痛に耐えられなくなつてしまつた時、一番近くにいて少しでも支えることができればいいと思う。

それも、弟としてではなくて、恋人として。

たとえ、世界中の人があなたになるとしてもかまわない。姉弟だからという理由で、この気持ちをどうして隠す必要があるだろうか？ だってこの世界に神はないのだから。何を恐れる必要があるだろう？

それに・・・

「僕はあなたを敵に回してもいい。姉さんの為なら」

そう、舞の為なら、それさえ恐くはない。

七色のステンドガラスが、静かに僕を見つめていた。

? memories (6)

世界は笑っていた。

世界は泣いていた。

世界は怒っていた。

世界は・・・。

両手をそつと広げて深呼吸をする。鼻腔を通して肺に流れてくる空気は潮の香り。耳を擦る波の音と、チラチラと輝く空の星。目を凝らして見なければ、どこからが空で、どこからが海なのか分からぬほど、一つは闇を纏い、星を抱きかかえていた。

「智也くんは悲しいって思ったこと、ある?」

隣で、僕と同じように海を見ていた姉さんがそう言った。

「うん。たぶんあるよ」

「そう

彼女がどうしてそんなことを訊いたのか分らなかつたけれど、その声は迷子になつた子供みたいに心細そつたから、僕は姉さんがどこか遠くへ行つてしまわないよう、砂の上に置かれた手をそつと重ねる。

「私はね。悲しいって思ったこと、今までなかつたのかもしれない。だつて……」

強い風が吹いて、銀色の睫毛を瞬かせた彼女は、「本当に悲しい時つて、心がこんなに痛くなるんだつて初めて知つたから」と言つた。

春の終わり。連れだつて夜の海にやつてきた僕らは、星たちに話を聞かれないように、掠れ声で言葉を交わした。広い銀色の浜辺には一人しかいないと言つのに、秘密の言葉を交換する。

彼女が倒れてから、ちょうど四度目の手術を終えた夜。もう、あの魔法の言葉をもらつて、何ヶ月も経つてしまつた夜。彼女はこつそりと僕を病院の外に呼び出すと、何も言わないまま海へやつてきた。僕も同じように何も訊かずに彼女の後を付いてきた。無言で腰を下ろした姉さんは、ポンポンと隣を叩いて僕を促すと、黙つたまま海を見続けた。そして、

悲しいって思つたこと、ある？ そう、ポツリと言葉を落とした。

「心つてね。痛くても血が流れたり、痣ができたりしないでしじょう？ だから、誰もこの傷には気づいてくれないの。でも、私の心はもう、ボロボロになつてしまつたかも」

そう言つて微笑して見せる彼女は、今にも壊れてしまいそうで、なのに美しかつた。

「何度も、何度も痛い思いをして。何度も、何度も怖くて寝れなくて。苦い薬も飲んだし、お医者さんの言つひととを聞いて出来るだけのことはしたのに……」

私はどんどん弱くなっていく。

掠れる声に重なる波の音。

僕は何て言つたらいいのか分らないまま、唯、彼女の瞳を見つめる。触れた彼女の手の甲は思つていたほど柔らかなくて、骨の感触ばかりだった。正直、姉さんはびっくりするくらい痩せてしまつた。もともと細い彼女は一回り、また一回り、と手術をしていくにつれて小さくなつていき、今では腕なんか、僕が力を入れて握つたら折れてしまうんじゃないかなつてくらい細かつた。

もう体力も、気力も、姉さんには残つていらないかもしれない。

自分の愛する人が日に日に弱つっていく。それは、僕自身が何もできなだけに、苦しくて、悲しい時間だった。姉さんが言つようにも、心が痛むほど。血は流れないし、癌もできないから誰にも気づかれないけれど、本当に痛い。

「もう、終わりにしたいよ」と姉さんが言つた。

「私、結構頑張つたと思うんだ。もう、いいんじゃないかな? 智也くん」

星の瞬きを閉じ込めた瞳が僕を覗き込み、訊く。

「の苦しい日々から解放されてもいいんじゃないかな?」

「痛いのは嫌だしね。それに、私の体、傷だらけなんだよ」

そう言って彼女は自分の胸の辺りに手を置いた。

「四回分。結構大きいのが四本。すげく嫌だよ」

空いている方の手に砂が食い込む。僕はいたたまれなくて、彼女の瞳から皿を逸らした。

「私、どうしたらいいのかな・・・もう、お嫁にもいけないだろう。そんなことよりも、将来すらない。残った時間はそれほど多くはないだろ？」

「そんなことは」

慌てて否定しようとした僕に、突然、彼女は鋭い視線を向けた。

「もう、嘘はたくさんなの！ 智也くんまでそう言ひことを言ひの？ もう少し頑張つたら良くなるから、もう少し我慢すれば楽になるからつて」

みんな嘘ばっかり。

彼女の栗色の髪が宙に広がり、掴まれた袖が引っ張られて歪んだ。

「嘘を言ひのはやめて！ 智也くんまで私を騙さないで！」

「僕は・・・」

何て言えばいい。彼女の命が残り少ないのを知つて、何もできず

「こる僕は・・・。何で言えぱい？」

励ませばいいのか？怒ればいいのか？懇願すればいいのか？
どれも今の彼女にとつては無意味なことに過ぎないの。」

「もひ、分かつてゐる。私が壊れていることぐらい」

噛みしめた奥歯が音を立て、突き立てた指が砂を搔いた。

「嫌なの、痛いのは、苦しいのは」

彼女はそう言つて銀色の涙を零した。

たぶん、初めてだとと思う。姉さんが泣いたのを見たのは。ずっと
我慢してきて、気丈に振る舞つて、今、彼女の心は折れたのだと思
つた。僕を見据える瞳は見たこともないほど鋭いものだったのに、
彼女の大きな飴色の輝きからは水滴が零れ落ちて行つた。

だから、僕は細い肩を乱暴に抱き寄せる。

「「めんね」と彼女にだけ聞こえる声で囁く。

「何で？ どうして？」

僕の胸の中で嫌々をする姉さんは訊く。

「私が何をしたからこんなに辛い思いをしないといけないの？ 何
でこんなに痛い目にあわないといけないの？」と。

でも、僕はその答えを持つていなかつたから、唯、彼女を抱きし

めているしかなかった。

叫びは嗚咽を交え、ジャケットを通して感じる悲鳴が痛かつた。

「私が何をしたの？ いつまでこんな思いをしないといけないの？」

銀色の夜。波が優しく押し寄せ、星をちりばめた海がキラキラと輝く。吹いてくる潮風は時に強く、時に穏やかに頬を撫で、そして僕らを追い越して行つた。

どうしてだらう？ どうして姉さんなんだろう？

そんな問いは僕自身が何度もなくしてきた。

どうして、僕の一一番大事な人が苦しまなくてはいけないのか？ 病院と言つ鳥籠の中に囚われたまま、短い命を削りゆく姉さんを見て、その理不尽な現実に目眩がする。それでも、答えは誰も「教えてくれない。

「私は・・・」と彼女が言つた。

「このままどうなつてしまふんだろう。皆がそれぞれの人生を歩いて行くのに、私はあの病室で立ち止まつたまま」

それは、悲痛な叫びだった。

だから、僕は金色の輝きを放つ月を見上げて願つた。姉さんが少しでも楽になるように、その不安から解放されるように、涙を、痛々しい叫びを受け止めて欲しいと。優しい金色の輝きで守つて欲しいと。

小さな彼女の肩を抱きながら、僕に出来ることはそれだけだったから。

「もし」と震える声が言った。「もし、神様がいるなら、どうして私を助けてくれないの？ こんなに苦しいのに、こんなに辛いのに。私はもう、どうしていいか、分からなによ

「神様なんて、いないよ」

彼女の湿った瞳が僕を見上げ、大きな涙がまた一つ頬を流れて行った。

僕は優しくそれを指先で掬つて、それにと続ける。

「いたとしても、僕ら人間を助けてくれ程、暇じやないよ」

「そうかもね・・・」

クシュンと、鼻を鳴らした姉さん。僕は長い栗色の髪をできるだけ優しく撫でる。奇跡なんて、そんなものはあるわけがないのだ。いくら願つたつてそんなものは起きなかつたし、これから起きる気配もない。だから、人間は自分に出来るわずかなことをするしかないのだ。

「ねえ、智也くん

形のいい瞳が涙で揺れて、覗き込んだ僕は吸い込まれそうになる。「もう、私は泣かないから・・・。最後に思いつきり泣いてもいい

かな？

そう言った姉さんの肩は、もう堪えられないくらい震えていた。

それどころでも、どうしてダメだなんて言つてじができるだらう。

だから、確りと彼女に頷いて見せた僕は・・・もう一度、今度は出来るだけ優しく彼女を抱き寄せると、

「泣いていいんだ。僕の前なら・・・」と言つた。

人生でこんなに優しく言葉を伝えよつとした瞬間はなかつただろう。両腕の中で震える小さな温もりを感じながら夜空を見上げる。

春。銀色に染まつた砂浜に一人の弟姉がいた。

彼女は本当に小さな子供みたいに、思いつきり声を上げて泣いた。

悲しくて、悲しくて仕方がないといつよつ。まるで、今まで貯め込んでいた世界中の悲しみが彼女を通して一気に溢れてしまったように。

いつまでも、いつまでも・・・。

今夜、世界の涙は止まらなかつた。

夢を見たの・・・。

そこには色と音のない場所だった。

いや、正確には色も音もあるのだろうが、『無い』と感じてしまう、そんな場所だった。仰向けになつた後頭部越しに砂の擦れる感触がして、視界に飛び込んでくるのは星、星、星。耳を擦る穏やかな波以外、聞こえてくるのは姉さんの澄んだ言葉だけだ。

「いつだつたか、もう忘れてしまつたけれど。私は夢を見たの」

彼女の肌が直接僕の肌に触れ、高なる心臓と妙に氣だるい感覚が心地良かつた。

「どんな夢なの?」と僕は訊く。

「たぶん、悲しい夢。ずっとずっと、誰かを待つてゐるのだけれど、その人は来ないの。それでも、私は待たなければいけないの。だんだんと鎧びで行く風景の中で、私だけがぼつんと取り残されていく・・・そんな感じ・・・」

「それは悲しい夢だね」

「そう、悲しい夢」

そう言って、姉さんの頬が僕の胸の上でプクツと膨らむ。

「たぶん、待たせていたのは智也くん」

下唇を不満そうに持ち上げて彼女は言つ。

「どうして？」

「だつて……」

そこで恥ずかしそうに姉さんは顔を背けると、さりげなく体を起して両手で自分の身体を隠した。

僕らは服を着ていなかつたから、そんな風に海辺で体を覆う彼女を見ていると、有名な絵画を思い出してしまつ。別に、その絵画の女神を美しいとは正直思つたことはなかつたけれど、僕の目の前にいるヴィーナスはとつても美しかつたし、エロティックだつた。

「なかなか言えないものだね」と僕は言つた。

「何を？」

「好きだつてこと」

「そうね」

体を斜めに傾けた姉さんは僕の頬に手を伸ばす。

「どうして、私なの？」

「うん？」

どうして、と彼女はもう一度訊く。

「私のことを好きになってしまったの？」

そんな言い方をすると、姉さんを好きになつたことが悪いことみたいじゃないか。僕はそう思った。

「なら」と僕は彼女のまねをして下唇を持ち上げると、「どうして姉さんは、僕なの？」と訊く。

彼女は形のいい顎を少しだけ斜めに傾けると、

「智也くんは、私が寂しい時に、怖いくらい傍にいてくれたのも。まるで、私の心が分かるんじゃないかなって程」と微笑した。

「そうなの？」

大きく頷いて見せる姉さん。

傍にいて欲しいって思った時に、あなたはいつも一緒にいてくれた。

「これで好きにならずにいる方が難しいと思ふの」

「そうかな？」

「きっと・・・」

頬を赤く染めて僕から海へと視線を移す彼女。

「きっと、あなたと出会った時から、こうなることが決まっていたんじゃないかなって思えるくらい・・・今は、私が智也くんを好きにな

なってしまったことが自然に思えるの

「うん」

そう頷いて、僕は真っ暗な空に輝く月を見上げる。

金色の円。優しくて、澄んだ光。

たぶんこの世に神なんていないのだけれど、それに近いものがあるとすれば、それは月なんぢやないかって僕は思う。地上にいるすべての生き物の願い、涙、叫び、歡喜。それらすべてを受け止めてくれる。

奇跡を起こしてくれるわけでもない。

特別な救いがもたらされるわけでもない。

きっと、唯、全てを見て、全てを聴いて、全てを受け止める。それだけに過ぎないけれど、きっとそれがこの世界の神様の役目なのがもしかれなった。

「どうして・・・」

風が僕らの間を通り過ぎて行った。潮の香りを含んだ海からの風が。一瞬、彼女の栗色の髪が金色の光の中で揺れて、また静けさが支配する。

「どうして、智也くんは私のことが好きになつたの?」と彼女が訊いた。

音のない静かな世界で、愛する人が砂浜に横たわる僕の瞳を覗き込む。たぶん、世界の果てがあるならばここに違いない。なんとかくそう思えてしまう場所で、彼女が僕に訊く。

「私はこんなに弱くなってしまった。未来もない。なのに、どうしてあなたは私を愛してしまったの？」

揺れる瞳が彼女の不安な心を見せてくれたから、僕は体を起して彼女の正面に向き合つた。

ざいざいとした砂の落ち行く感触。

田の前の姉さんは、僕の記憶にある彼女のよつもずつと嬌んで、小さくて、弱くて。でも美しかつた。

抜けたままだ透明な肌には四つの傷跡。

僕はそれにそつと指先を這わせて、眉を寄せた。

「姉さんも言つたじゃないか。僕らがこつなるのは自然なことなんだよ」

「運命ってこと？」

「何度も繰り返しても、同じ選択をしてしまつ。そのことを運命というのなら、そうなのかもしれないね」と僕は言つた。

長い髪が彼女の肩から胸元へと零れて行き、傷を隠すように僕の指先を覆つた。

「私たちは姉弟なのに？」

「うん。それでも」

真剣な瞳。僕の好きな飴色の瞳が何度も瞬きを繰り返して、それは心を覗かれているみたいに深くて透き通っていた。

「僕は姉さんほど、『魂のひどく美しい人』を知らないんだ」

「えつ」

彼女は何を言われたのか分らないという風に一瞬瞳を丸くすると、「それってす』くキザなセリフね」と小さな声で笑った。

それにかまわず、僕はそつと彼女の胸から首筋に指を這わせて、「だから、姉さんが好きになつた。そのことに後悔なんてないし、これからもしない」

「本当?」

「うん」僕は力強く頷くと、「だつて、この世界に奇跡なんてないのだから。神様はいないのだから。だから、僕らが姉弟だつていいじゃないか」と言つた。

世界の果て。金の月と銀の砂。僕と姉さんしかいないう所。

たぶん、僕にとってこの場所は完成されていた。不足ない場所だった。

「私と一緒にいることで、智也くんを不幸にしてしまうかもしれない

「いわ。それでもいいの？」

飴色の瞳がそう僕に訊く。

「僕にとつての不幸は、姉さんと一緒にいられないことだよ」

だつてそうだろう？

姉さんがいひことで、世界はこんなに完成されているのだから。

「僕は姉さんほど、魂の美しい人を知らない。そして、そんな姉さんを好きになつた。それはどうしようもないことで、どうかすべきことでもない。だから、今は姉さんも僕のことを好きだと言つてよ」

「うん」と、彼女は小さく微笑して、「分かったわ」と頷く。

もう、何も必要なものはなかつた。

ここには姉さんがいて、僕がいて、全てがそろつていたから。

だから、ずっと夢の中でポツンと佇んでいた彼女と、今は少しでも一緒にいたかった。

重なる肌と体温。

滑りかな感触が触れ合つて、ゆっくりと僕は彼女を砂の上に押し倒した。

「ずっと待たせてしまつたね」

色褪せて行く夢の中で、一人待つ姉さん。

僕はもう、離すことはないだろう。

絡み合ひ指先に吐息が交じり、彼女の言葉が僕に囁く。

『智也、愛してる・・・』

何度も繰り返されるその言葉は、もう僕の勘違いではなかつた。

* * * : * * *

「そんなことが……」

彼女は手にホールの前で両手を組むと、何かを懐かしむふうに微笑みながら言った。

「まあ、姉弟だったから。そんなことでもないと、愛し合つようにならなかつたと思つけれど」

だから、と僕は彼女の艶色の瞳を見つめて、

「今でも……君のことを、本当に素直に喜ぶことができず、いふるんだ。君の不幸がなかつたら、僕たちの関係は変わらなかつたはずだから」と言った。

七色の光。小さな教会のステンドグラス。僕らはちょうどその赤子を背にして座っていた。

「あなたは辛い思いをしてきたのですね」

でも、僕はその言葉に静かに首を振る。

「単に辛いといふのとは違うんだ。君は僕の世界そのものだったから……悲しいことだつて、嬉しいことだつて、全てを受け止めないといけなかつた」

「それは辛くなかったのですか？ 今のはだと……その、私の状

態はす「」悪によつですが

その言葉に、ぽんやつと思いを過去に馳せる。

「もう、忘れてしまつたよ。僕はただ君と一緒にいたくて、必死だつたのだから」

そう。もう、忘れてしまつたよ。

君がいなくなつて、ずいぶんと一人色褪せた夢の中に置き去りにされていたのだから。

もう、忘れてしまつた。

ぱつり、ともう一度、そう言葉を漏らした僕に舞は白くて細い手を伸ばす。掴まれたせいでつぶれるジャケットの袖。見上げる瞳が申し訳なさそうに僕を見つめる。

「私は憶えていませんが、あなたを感じることはできます。私にとって、あなたが大切な存在であることは分かるんです」

七色の光が栗色の髪を照らし、揺れる蠟燭の明かりが瞳を揺らしていた。あの時のまま。僕の知っているままの姿で舞は隣に座っている。もう、ずいぶんとあれから時間が経つてしまったというのに。

「君は変わらないね」と僕は言った。

「そうでしょうか？」

「うん。変わつてない」

「あなたは変わったのですか」

彼女の手に、自分の手を重ねて、ひやりとした感触に彼女が冷え症だったことを思い出しても懐かしく思つ。

「もう、忘れたよ」

「それでも、この場所に来たのですね」

「・・・」

その一言に、僕は微かな驚きを感じる。

「約束・・・憶えていたの？」

「いえ」舞はすまなそうに頭を振ると、「今、思い出したんですよ。他のことはまだ分からぬままですけれど」と小さく笑つた。

「そう。思い出したんだ」

約束。

僕と舞が交わした約束があつた。

それは約束と言つには一方的過ぎて単に僕が押し付けただけだったけれど、舞が憶えていてくれたこと、思い出してくれたことに嬉しくなる。

「気がついたらここにいたから、どうしてだろうと思つていたんで

す。でも、それはあなたとの約束があつたからなんですね

「そつか。随分と待たせてしまったね」

「ええ。随分待ちました」

でも、僕だつて長い時間一人で取り残されていたのだから、お互
い様だと思う。

「長かつたです」と舞が言つて、

「そうだね」と僕が答える。

「一人は寂しかつた?」

「ええ。寂しかつたです」

蠟燭の明かりが静かに揺れて、扉の外で強い風が通り過ぎて行つ
た。今日はクリスマスなのにこの教会には僕と舞しかいなくて、世
界はもうずっと前に終わつてしまつたんじやないかつて思えてくる。

でも、思えば、僕の世界はずつと前にすでに終わつてしまつた。

そして、終わつた世界に一人残されるのは、想像以上に辛くて苦
しい。それでも、錆びついていく夢の中に佇む僕はどうすることも
できないまま、唯、待つていたんだと思つ。・・・舞を。

「話の」と彼女が言つた。「話の続きを聞かせてくれませんか?
私とあなたの物語の続きを

白いコートから零れる白いレース。その間に長い髪が流れ。僕
はそんな彼女の姿に目を細めながら、繫いだ手をもう一度握り直す。

寒い夜。本当に死んでしまいそうなくらい寒いクリスマスの夜だつたけれど、僕の隣には舞がいてくれたから少しも寒いと思わなかつた。

「確かあれは・・・」

そう言つて僕は白い息が蝋燭の中で揺らめぐのを眺めながら過去の扉に手を掛ける。もう、錆びついて、色が褪せてしまった記憶だけど、掛替えのない大切な時間に、忘れる事のできない瞬間に。

夜が明けるまで、まだ時はあるのだから・・・。

* * * : * * *

「コシン、コシン、と音を立てながら、舞は僕の一歩前を歩いていく。煉瓦造りの歩道を踵が蹴つて、珍しく左右一いつに分けたポーテールが弾んでいた。そう言ひ髪形は、確か、ツインテールと言つのだつたろうか。

冬の街。

まだまだ寒い僕らの街。

今日僕らは、見慣れたこの街の中を歩いて回るといつ、小さな旅に出かけていた。

本当はもつと遠くの旅館とか、ホテルとか、ペンションとか、そういうところに旅行にいくつもりだったのだけど、舞の体調を考えて散歩とも言えるこの小旅行に変更した。彼女が倒れたのが寒い冬の真中だったように、寒さは体調を悪くするみたいだつた。もちろんそれはほんの小さな変化だつたけれど、僕が見逃すはずがない。あつたかい季節がまた巡つてくるまで、少し辛い季節。彼女自身は大丈夫だと言い張つたけれど僕はやっぱり心配になつて、不満そうに下唇を持ち上げる彼女を説得したのだつた。

「また、夏がやつてきたら行こうよ」

そう言ひ僕を、恨めしそうに見つめた舞は、「本当に?」と何度も確認を取つていた。

「本当、本当。僕だつて舞が心配だから言ひただよ

「それは分かつてゐるけど……」

智也は心配しすぎだよ。

そう小さな声で言ったのは僕に聞かれない為なのだろうか。

「だつて、もし遠くに出かけて倒れたりでもしたら大変じゃないか。
だから冬はやめておいた方がいい」

大丈夫よ

「でも、『一番リラックスできるから』って理由で、家の療養を認めてもらっているんだから・・・旅行になんて出かけたら・・・」「

ふう、と溜息を吐く舞は、僕のベッドの上で膝を抱えてつまらな
そうに体を揺らした。そんな様子を見ていると、どっちが年上なん
だか分からぬ。

「今までだつて大丈夫だつたのに」

「でもねえ……」と僕は眉を寄せる。

確かに彼女が一樣の退院を認められてから、特に大きな病状の変化は無かつた。けれど、やっぱり初めての旅行ともなれば不安は絶えない。

「智也は私と旅行したくないの？」

小さなテーブルを挟んで丁度真向い。顎を少し引いて僕を上目で

覗く彼女は、計算してやつているんじゃないかつて思えてしまつほど、見ていて切ない表情をする。

「もう少しあんしたいに決まつているよ」

「なら・・・」両足をベッドから放り出して、舞は言ひ。「一緒に旅行に行こう。だつて、約束したじゃない。今度の週末に旅行に岡かけるつて」

「・・・」

今思えば軽率だった。

軽い気持ちで交わした言葉というのは、いつも後で後悔させられるのだ。そもそも、一緒に旅行に行こうと言い出したのは僕の方だったし・・・。その時の考えの足りない自分自身を、殴つてやりたいとさえ思つ。だから、僕は一つの提案をする。

「分かつた。いきなり遠くに出掛けるのは心配だから、少しずつ距離を伸ばしていくところのはどう?」

「どうこう」と舞。

「最初は家の近所から初めて、だんだんと遠くに目的地を変えて行くんだ。そうして、僕らが一人で安全に行ける距離を段階的に確かめて行けばいい。どう?」

人差し指を唇にあてて天井に視線を泳がせていた舞は、ここいら辺が妥協点と判断したのか、

「うん。それでいいよ」と微笑してくれた。

そう言ひわけで、今僕らは街の散策を行つてゐる。

「今日は天氣がいいね」

少し前を歩く舞が首だけ振り返つてそう言つた。

「うん。絶好のピクニック日和だよ」と僕は答える。

「智也?」

「ん?」

クルリと「一テの裾を宙に浮かせて僕に向き直つた舞は、「今日はピクニックじゃないのよ。旅行よ、旅行」と何故だか嬉しそうに言つ。

本当は旅行でも散歩でもピクニックでも、呼び方なんてどうでもいいような気がしたけれど、きっとほとんど外に出ることのない舞にとつては大切なことなのかもれないと思つ。

見飽きてしまった街の風景。おなじみになつてゐる店。

ここにあるもので知らないものなんてないのかもしない。だって、僕らはこの街で育つたのだから。けれど、舞はそんなありきたりの世界を楽しそうに歩いて行く。

コシン、コシン・・・。

弾む踵を鳴らしながら。

「ねえ、あそこでお會いしない？」

丘を指す舞。

青い空へと伸びて行く煉瓦の道。左右均等に背の高い街灯が整列して、小さな教会が佇んで居る。彼女はその向こうを指さしていた。

「あそこって墓地じゃなかった？」と僕は訊く。

「そうだったかな？」

彼女は少しだけ何かを考えて視線を宙に投げると、「でも、いいんじゃない？ 見晴らし、よさそうだし」と笑った。

長い髪が舞の表情を隠す。

「ね。そうじよひ」

再び現れたのは楽しそうに笑う子供のよつな瞳だった。

全く仕方がないと思つ。いつも顔をされると、僕は何も言えなくなつてしまつ。きっと、墓地でお弁当なんて非常識だし、怒られるかもしれないけれど、それでもいいかなとか思つてしまつのだ。

「よひよひ」

楽しそうに急かす舞の背中を追いかけて、僕は煉瓦を蹴つていいく。

そんなに急ぐと体調を崩すんじゃないかつて少しだけ心配になつたけれど、今のところ大丈夫そうだった。

弾む足音と跳ねる呼吸。

坂になつて見えなかつた丘からの眺めは、突然僕らの前に姿を現した。

「うわあ」と、田の前で立ち止まつた舞が声を上げる。

「うわあ」

つられるように僕もうつ声を上げた。

「・・・」じんなに綺麗なところがあるなんて知らなかつたわ

「そうだね」

空に向かつて伸びる歩道を登つてたどり着いた丘は、田の前いつぱいに海と空が広がつていた。

見渡す限りの青、青、青。

確かにそちら中に墓石が建てられていたけれど、それでも陰鬱な感じはしなかつたし、むしろ清々しかつた。足元には緑の芝が敷き詰められていて、崖になつている先から見えるのは海と空だけ。きっと死に行く者が良い景色の見える場所に弔われることを望んだから、じんな場所に墓地を作つたのかもしれない。

「ここ場所だね」と舞がうつとつと囁く。

「ほんと。墓地があるってことは知っていたのにね。こんなに眺めがいいなんて……・・・知らなかつたよ」

まるでそこは、世界の限界だった。

僕らの世界の終着点。

「の先は空と海だけ。

「うん」と舞がぐぐもつた声を出しつつ、N生の上にN生のまゝクロスと仰向けになつた。

「空があんなに近いよ。智也」

「空が近い?」

「ほら、と囁くように、N生の手で叩いて見せた。そうするの、傍におこでと囁くのだ。

「ほんと、空が近い・・・」

「そうでしょ」と彼女が瞳を細めて隣に並んだ僕を見る。

「うん。なんかこうしてみると、空が届きそうな気がするよ

舞と向じよつてN生に向かう寝そべつて、右手を思つつき青に伸ばして見る。N生は、在るよつでない、近つて遠く、広い、広く空。

「僕たちが見るものの中で、一番遠くにあるものってなんだか分かる」

「ほんやうと僕は訊いてみる。

「そうね」

「隣からのんびりとした声が上がり、

「なんだろう。太陽、月、星。そんなものかしら?」と。

ふわりと風が丘を駆けあがり、隣の彼女から甘い香りが僕の鼻腔に届く。果物みたいな、甘い匂い。

「うん。正解だよ。僕らの視界にとらえることのできるもので、最も遠くにあるもの。それは全部空の中にあるんだ」

「そう言われてみれば、そうね」

「だから、人は空を飛びたいと思うのかもしれないね」と僕は言つた。

自分で確認することのできる最も遠い場所。それは自分の世界の限界。生まれたときから傍にあり、でも決して行くことのできない場所。だからこそ、人は空を飛びたいと思うのだろう。自分の世界の限界を知りたいから。

「智也は、時々面白っこことを考えるよね

舞は落ちてくる前髪を払いながら、隣にいる僕を見る。飴色の瞳が栗色の髪から覗いて、いたずらっぽく光った。

「そう？ 舞ほゞじやないと思ひけどね

「そんなことないよ。なんか、哲学者みたいに不思議なことを・・・でも詩人みたいにロマンティックなことを、言ひやうね。普段は身も蓋もないリアリストなのに」

「それ、褒めてるの？」

「何となしに訊いた僕に、

「たぶん」と彼女は舌の先をちょっとぴり出した。

その時、心地よい風が舞の声を拾つて過ぎて行った。僕らの知らない、見たこともない遠くの街へと。今、僕らの旅は、この小さな街の小さな墓地までだけれども、いつかもつと遠い世界に行けたらいいと思った。隣の街を超えて、山を越えて、海を越えて、この風すらも追い越して。そうしたら、いつか空へとたどり着けるかもしない。

僕らの世界の限界に。

「ねえ

真つ青な空を見上げたままの横顔がそつといた。僕はその白い頬を人差し指でなぞつて聞いているよ、と合図を返す。

「智也は、知つてるかな？」

私たちの頭の中はこの大空よりも広い

ほら、一つを並べて」じらん

私たちの頭の中は大空すらも、やすやすと容れてしまつ
そして、あなたまでをも

私たちの頭は海よりも深い

ほら、二つの青と青を重ねてじらん

私たちの頭は海を吸い取つてしまつ

まるでスポンジがバケツの水を吸い取るように

私たちの頭は神様と同じ重や

ほら、一つを正確に測つてじらん

違うとすれば、それは・・・

言葉と音の違いほど

遠くからやつてきた潮の風が、空に向かって伸ばした彼女の指の
間を、音を立てて通り抜けて行つた。近くに佇んでいる葉のない木
の枝が転寝に音を立て、温かい日差しが真つ青な空から僕らを見て
いる。

「エミリー・ディキンソン

言葉を切つた舞は、そう異国の名前を僕に教えてくれた。

「生きている時はたつた七つの詩しか世に出なかつたのに、今では
千七百篇もの作品が知られているの」

「それ、少しだけ聞いたことがある様な氣もするよ」

「うん

伸ばした腕が「ホールの袖からむき出しになり、彼女の白い肌が青の中に投げ出される。

「この詩を思い出すと、自分が悩んでいることとか、苦しみでいることが、本当に小さことのよつて思えてくるの」

「そうだね」

「私には智也もいるし」

「うん」

だから、と彼女は笑った。

「きっと私にもこの大きな空よりも広い可能性があるのかも知れないわ。いいえ。私・・・ではなくて、私と智也に」

「うん」

「私だけじゃ足りないかも知れないけれど、でも、智也がいてくれるから」

「そうだね。僕がいるから」

そう言つて、伸ばされた手に自分のものを重ねる。真っ青な空に投げ出される一つの腕。太陽の穏やかな光に包まれて、僕らは手をそつと繋いだ。一人では得ることのできなかつた時間がここにはあつて、きっと僕らはこれからもずっとそれを大切にしていくのだろう。

世界の限界で繋がれた僕らの心。

一人の想いはこの大空よりも広く、海よりも深く。そして、神様と同じ重さだった。

「あつ、雨

学内にある図書館から出た時、僕の田の前を一筋の水滴が落ちて行つた。田を細めれば、どこまでも続く雨の縦ラインがアスファルトを黒く湿らせている。見上げた空は憂鬱なほど灰色で、歩道を歩く学生たちはチヨロチヨロと、腰を曲げて足早にどこかに駆けて行つた。それは、空が今にも落ちてくるんじゃないかなって脅えているみたいに思える。

一度大きな溜め息を吐いた後、たまたま持つて来ていた傘を取つて憂鬱な空に向かつて広げる。そうすると、モノクロ映画の中で花だけが、真つ赤に塗られたみたいだつた。何故なら持つて来ていた傘は、舞のチューリップ色の傘だから。

どうして、真つ赤な色をチューリップ色と言つの？

僕がそう舞に訊いた時、ちゅうゞ文庫本を読んでいた彼女は大きな瞳を瞬かせて、

「だつて、その方が可愛いと思つでしょ？」と訊き返した。

どうしてそんなことを、とでも言つよつて瞬かせる睫毛が長いから、もしかしたらパシパシと、近づいたら音が聞こえるんじゃないかつて思ったのを覚えている。のんびりと田溜まりの中でもくつろいでいる彼女の髪が金色に揺れて、珍しく掛けた眼鏡が少しだけ印象を変えていたから、僕の鼓動は少しだけ早くなつた。

そうして、その時から赤色は僕の中でチューリップ色になつた。

僕にとつて舞が赤と言えば赤だし、チューーリップ色と言えば、たとえそれがまったくそぐわない色だったとしても、チューーリップ色になるのだ。本当に自分でも困ったものだと想つけれど、こればかりはどうしようもない。

「それにしても、チューーリップ色の傘はないよな

なるべく縁を深くして、真つ赤な傘を差している僕が外から見えないようこした。だって、こんな色の傘を男がしているなんて、恥ずかし過ぎる。

『智也？ 傘持つていかなーと・・・今日、降るひじこよ

玄関先に見送りに出た舞。大きめのカーディガンを着て、眠そうに瞼を擦る彼女が僕に寄越したのはこの傘だった。

「いこよ。じうせ降らなーいだらうし」

「ダメだよ、そんなこと言つて。今日は雨が降るつて、天気予報で言つていたもん」

そう言われて田を細めた空は、雲一つない快晴で眩しかった。

「じうせ外れるんじゃない、天気予報。いつも外れてばっかりだし

僕は晴れわたる空の下、傘を片手に帰宅する面倒を考えて彼女の手を押し返す。でも、何故だか時々頑固になる彼女は、

「ダメだよ。雨が降つたら智也風邪引いやつでしょ。降らなかつたら持つて帰つてくればいいんだし、ちゃんと持つていきなさい」とお姉さんらしさことを言つてくれたのだ。

吹いてきた北風に体を小さくしながら、僕はポケットに手を突っ込んで朝の舞に小さく感謝する。

「でも、自分の傘を持つて来れば良かったなあ」

チューーリップ色の傘なんて、男が差すもんじやないから。

ジャケットのポケットに空いた方の手を入れて、もう片方で傘を持つ。行き交う人のほとんどが、突然変わった空の機嫌に、慌ただしく道を駆けて行った。僕はその中を、チューーリップを咲かせて歩いて行く。パシャリ、パシャリ、と雨の道を踏みしめながら、ゆつくつと、ゆつくつと。

ちょうど、校門を出て自宅への帰り道。丘に続く上り坂を登っている時だった。真っ白い顔で空を見上げている七瀬を僕が見つけたのは。

目が合った瞬間、お互いにしまった、といつ顔をした。別に何が拙いと言つわけではないのだけれど、それでもこんな雨の日に不意に出会いたい相手では、彼女はなくなっていた。七瀬もきっと同じ気持ちなのだろう。狭い軒下にいる彼女は、着ていたコートの肩をすっかり雨に濡らして、湿った前髪を小さな額に張り付かせていた。

「傘……忘れたの？」

どうするか一瞬だけ迷つたけれど、僕の方から彼女に声を掛ける。

「よかつたら……狭いけど一緒にに入る？」

小さく頷いた七瀬の方に傘を半分譲つてスペースを作る。背の低い彼女は少しだけ躊躇つたように靴の先を迷わせたけれど、ありがとう、と言つて隣に並んだ。下から覗く瞳が微かに揺れて、寒さに色を失つた唇が震える。

「久しぶりな気がするね」

コツン、ヒレンガを彼女のブーツが叩いて雨の街に踏み出す。

「やうだね。前はいつも一緒に帰らないもんね……」

「うん。最近は一緒に帰らないもんね……」

確かに、前回まともに話をしたのは階段でのこと。あれから僕らはずつと会話という会話をしなかつた。いや、できなかつたと言つた方がいいだろうか。

もちろん、必要な時には口をきくし、顔を合わせれば挨拶ぐらい交わす。でも、一人きりになつて話をしたことはなかつたし、まして肩を並べるなんてこともなかつた。はたから見たら少しの変化だろうけど、僕らの関係は決定的に変わつてしまつた。だから、顔を合わせるのが久しぶりに感じるのかもしれない。まだ、あの日からそれほど時間は経つてないと言つのに。

「ねえ」と小さな声で七瀬は言つた。「皐月くんは、雨、好き?」

坂の上から流れてくる雨水を足の縁に眺めながら、以前もそんなことを訊かれたことがあつたな、と思つ。

「いや。好きじゃないよ。雨が降ると寒いしさ」

「そ、私は好きなんだけどな」

白い横顔がどこか遠くを見ながら、残念そうにそう言った。

「晴れた青い空は、好きじゃないの?」と僕は訊く。

「うん。なんだか氣味が悪いから」

「氣味が悪い?」

訊き返した僕に、彼女は口の端を上げて笑うと、「だって、あんなに掴みどころのない青がどこまでも広がっているんだよ。それは、凄く氣味が悪くて私は怖くなる」と言つた。

其処に在るのか無いのか、深いのか浅いのか。そんなことすら分からせてくれない青が自分の頭の上にあり続けるなんて・・・。それよりも、雨を落としていく厚い雲が空を覆つている方がずっといい。

七瀬の長い睫毛が水滴に光つて、頬を涙のよじて伝つて行く。

「そんなこと考えたこともなかつたよ」

「うん、普通はそんなこと考えないよね。たぶん、私くらいだと思うよ、そんな陰気なことを思つのは。誰だって爽やかな青空の方が好きだよね」

彼女はまた口の端を片方だけ上げて笑つた。なんだか、声に力がないよつて感じるのは氣のせいだろうか。

「私、子供のころ思ったの。もし、空が落ちたら大変だつて。それはね、もう、本当に心配してたんだ。子供のちっちゃな頭でいっぱい考えてね」

でも、ある時気がついてしまったの。

「周りの大人たちは、誰もそんなことを気にしてないってことだ。子供にとつて、大人は何でも知つていて、何でもできるすごい人じやない。だから、そんな人たちがこんなことに気付かないなんてどうしてだろうって思つてた」

チューーリップの外には灰色の雲。うす暗い空から降つてくるのは絶え間ない雨。皆が隠れるように家の中に入つてしまい、時々車が僕らの横を走り抜ける以外は、何の気配もない坂がどこまでも続いている。

「それで、七瀬はどうしたの？」

なんとなく僕はそう訊く。

チラリとこちらを見た彼女はつまらなさうに踵をレンガにぶつけて、「どうもしないよ。唯、私はそのことを考えるのをやめただけ」と言った。

「なんだ」

彼女の肩が僕に当たつて、また離れる。それほど大きくない傘に二人だったから、僕も彼女もすっかり濡れてしまっていた。たぶん、七瀬もそのことに気づいていたのだろうけど、決して傘から出ると

は・言わなかつたし、僕も気付かない振りをした。だつて、もしされを言つてしまつたら、それは別れの合図になるから。

じばらべ無言で足を進める。

どちらかが何かを言つてしまえば、もう話すことはない。語ることはない。そんな重たい雰囲気が僕らの間にはあつた。けれど、二人ともどうしたらしいのか分らない。そんな感じだ。

「たぶん、その時から私は、自分を他人に合わせようとし始めたのかもしれない」

沈黙を破つたのは七瀬。湿つた長めのポーテールが力なく揺れて、僕の肩にあたつた。

「だから、私は自分の気持ちに嘘を吐くのが得意なの」

そのはずなの。

彼女の足音が止まって、僕のジャケットの裾が引っ張られる。傘からはみ出した七瀬は、雨に晒されながら僕の袖を遠慮がちに捕まえていた。

「どうしたの?」と僕は振り返った。

チュー・リップから灰色の空へ。彼女は僕を濡れた前髪の隙間からじっと見て、

「得意なはずなのに、どうしてか、あなたのことだけは忘れる」と

ができないの。自分の心に嘘を吐けないの。『友達として』なんて言つておいて、こんなことを言つのはおかしいけど、ここがずっと痛いの」と笑つた。

彼女の掌が置かれた胸。次から次に空から落ちてくる雨が、当たつては弾けて行く。

きつと彼女は泣いているんだと思った。

頬を伝うのは涙なのか、雨なのか分からなかつたけれど、たぶん彼女は泣いているんだと思った。笑顔を一生懸命に張り付けてはいたけれども、痛々しいくらいに引き攣つた表情は、もう『笑顔』なんて呼べるものじゃない。

「皐月くんが悪いんじゃないのは分かつてゐる。でも、どうして私を選んでくれないのか・・・そのことが悲しくて、悲しくて仕方ないんだあ」

「僕には好きな人がいるから・・・」

「でも」と彼女が言つた。「その人は皐月くんのこと、好きじゃないんじょ？ 片思いなんじょ？ なら、とりあえず私と一緒にいればいいじゃない？」

雨にすっかり濡れてしまった彼女に、僕は傘を差し出す。狭い傘に一人。傘の影に隠れた彼女の瞳が、猫のよつに僕を見つめた。たぶん、胸が千切れそうに痛いのは、嘘を吐いているから。そして、これからも付き続けるから。

「そんなこと、できないよ。だつて、七瀬はこんなに真剣なんだか

「…」

「皐月くんは優しいだね」と彼女が苦笑した。

「そんなことはないよ」

「うん。優しいけど、優しくない」

彼女の人差し指が僕の胸を刺す。

「もう、優しくしないでいいから。友達なんて、やっぱり無理なんだよ。だって、私のココはこんなに痛いんだから」

押された胸が彼女の指に合わせて皺を寄せた。

きっと、僕が微かに後ずさってしまったのは、七瀬の力が強かつたからじゃない。指先に込められた想いに、気落とされたからだと思う。

「ねえ」と七瀬は言った。「私は、皐月くんのことを忘れるようになら努力するよ。たぶん、そうするしか方法はないから。だから、皐月くんはその好きな人と絶対一緒になつてよ」

「…」

「だつて、そうじゃないと、何のために諦めたのか分らないじゃない。だから、絶対に皐月くんはその恋を叶えてよ」

「…」

僕は何も言えなかつた。唯、雨音が耳にうるさいくらいに響いて、体が金縛りにあつたみたいに動かなかつた。真っ白な七瀬の顔が、暗い街の中で僕の瞳を捉えて離してはくれなかつたから。

「じゃあ、もう行くね

七瀬はそう一言、言い残すと、突然、坂の向こうに駆けて行つた。何も話す言葉を持つていらない僕を置いて、ポーテールを揺らしながら。

これで終わりでいいのだろうか？

僕はどうしたらいいのか、どうすべきなのか分からぬまま、彼女の去つていつた方をぼんやりと眺めた。そして、心の痛みに耐えかねるよう、気付いた時には七瀬の背中を追いかけていた。

「ビッシュ……？」

背を向けたままの七瀬がそう訊いた。

「分からぬ」

「もう、皐月くんの」とは忘れるつて言ひたじやない。ビッシュ、追いかけてきたの？」

波打つ海をいくつもの波紋が駆けて行つた。止むことを忘れてしまつた空は、次から次へと雨を落としていく。灰色の雲と、機嫌の悪い海。

「七瀬が……」と僕は言いかけてやめる。その後に続ける言葉が見つからなかつたから。

「言つたじやない。誰にでも優しいのは優しくないと同じなんだつて。皐月くんの優しさは、私には辛いんだよ」

力なく垂れた黒いポーテールの先から、重みで耐えきれなくなつた雨が一定の間隔で落ちて行くのが見えた。僕は彼女に傘を向けよつとして、やつぱり途中でやめてしまう。その小さな肩が、僕を拒絶するやつに震えていたから。

何をしようとしても、僕は中途半端だった。七瀬に掛ける言葉も、行動も、気持ちも、全部中途半端。

「皐月くんは私のことを振ったんだよ。どうしてこれ以上私に関わるつとするの？ その好きな人と一緒になることだけを考えなよ」

「でも・・・」

その時、振り向いた七瀬の瞳は見たことのないほど鋭く、怒りで燃えていた。

「『でも』じゃないよー。どうして？ どうして私を苦しめるのよ。もうやつとしておいてよー。」

嗚咽を含んだ叫びが打ち寄せる波と混じり合い、突き放たれた言葉が心を叩いた。もう終わってしまうんだって、もう取り返しは付かないんだって、気付いてしまう。それはひどく悲しいことだった。

「分かった」

奥歯に力を入れて、僕はそう言った。何が分かったのかも分からないまま。

視界を雨が遮って、頬をヒンヤリとした感触が伝い始めた。後から後から絶え間なく落ちてくる雨に、七瀬の姿がグニャリと歪んでいく。

「どうしてやつを罵る顔をするの？」

怒っているのか、悲しんでいるのか、憐れんでいるのか。そのどれもが含まれる声で、彼女がそう訊いた。

「私だって、勇気が必要だったのに。苦しみ想いをしたのに。なのに、どうして皐月くんが泣いてるのよ？」

「え？」

僕は自分の頬に手をやつて雨を拭う。

どうして七瀬は僕が泣いてるなんて言うのだろう。これは雨なのよ、唯、空から流れてきた冷たい雫なのよ。むしろ泣いているのは七瀬の方じゃないか。

「僕は泣いてないよ。雨が目に入っただけ。唯、それだけだよ」と笑つて見せた。

次から次に流れてくる雨が頬を濡らして、これじゃ勘違いされても仕方ないじゃないかと、慌てて拭い続ける。彼女は僕をジッと見つめた後、瞳を切なく細めて、

「皐月くんは、傘を差しているじゃない」と静かに言つた。

「え？」

確かに僕はチヨーリップ色の中にいた。表面を静かに打つ音が広がる骨の先から零れ落ちていく。そうか、僕は本当に泣いてるんだ・・・。そう自覚した瞬間に、鼻の奥の方がゆっくりと熱くなつていく。

「どうして？ あなたは私のことなんてどうでもいいんでしょ？ 他の女を選んだんでしょう？ どうして、そういう顔をするのよ。私がこんなに辛い思いをしてるのに、皐月くんはまだ苦しめるつもりなの？」

そう言つて肩を震わす七瀬を見て、初めて気付いた。僕の知つて
いる彼女はこんなに弱くて儂い女性だったのだと。押し寄せる強い
波の粒に攫われてしまいそうなほど、目の前に佇む彼女は依りど
のない存在だった。

だから、七瀬が以前に僕に言つた言葉を思い出した。

『誰にでも優しいのは優しくないのと同じ』。それは本当だったの
だ。もし、僕の優しさが彼女をこんなにも苦しめているのなら、そ
れは優しさではない。

一度伸ばそうとして宙を掻いた右手をジャケットに押し込むと、僕
は前髪に隠れてしまつた彼女の瞳を探しながら、

「もう優しくしない」と言つた。

ハツと彼女が息を呑むのが分かつた。

「もう、七瀬と僕は他人だ。単なる同じ大学の生徒。これからは、
そういう関係として接するよ」

「わ・・・つた」

嗚咽で声を詰まらせながら七瀬は頷き、これが最後であることを
自覚する。

急に今までの彼女と過ぐした記憶が頭を過つて、胸がキリキリと
音を立てる。

すっかり雨に濡れてしまった七瀬。冷えて真っ白になつた顔から、

整った瞳が僕を見つめていた。紫色の唇が言葉にならない音を何度も作つたけれど、結局何も言つことはなかつた。

灰色の空。土砂降りの雨。機嫌の悪い海と冷たい冬の風。

一度静かに空気を吸い込んで、痛む心臓に酸素を送り込んだ。

「さよなら・・・七瀬」

泣き崩れる彼女の声に、心の半分が消えてしまった。けれど、一度背を向けた僕が振りかえることは、決してなかつた。

* * * : * * *

両腕で体を覆い、寒さに体を小さくする舞。時折大きく吐き出す息が煙の様にクルリと舞つて、視線の先で消えていった。燈されてる蠟燭の炎が微かに揺れる。

「あなたは七瀬さんが好きだったのですか？」

高い天井に投げ出した彼女の声が辺りに響く。三回ほど耳に同じ言葉が届いた。

「たぶん、好きだったと思うよ」と言いながら、チラリと彼女が視線を外したのを確認する。

「僕は七瀬が好きだったと思う。それは決して恋ではなかつたけれど、でも好きだった。たぶん七瀬が男だったら、良い友達として長く付き合つことになつたと思う」

「でも、彼女は女性だった」

「うん。だから、僕と七瀬の関係は終わつてしまつた」

小さな溜息が横から聞こえた。

「私とあなたは姉弟だったのに・・・それでもあなたは私を選んでしまつたんですね」

舞は他人の様に自分のことを話すんだな。そう思うと今更ながら少しだけ胸が痛んだ。こつして一人で並んで話していると、昔に戻つたみたいに感じるから。

「今でも思うよ。僕が君に出会わなかつたらどうなつていたのか？もし君が病氣にかかることがなればどうなつていていたのか？そんなくだらないことをね。そこには今より幸せな未来が待つていたのかも知れない。悲しいことも、苦しいことも、後悔もないのかも知れない」

無言で頷く瞳に田を細めて、

「それでも、僕は君と一緒にいたかつたから」と言つた。

思えば、唯、それだけだつた。理屈や理性。そんなものはどうでもよかつた。唯、舞と一緒にいたかつた。それだけ。

「でも」と彼女は白い息を吐いて、「それで、あなたは良かつたのですか？ 私はあなたの隣からいなくなつたのに」と訊いた。

二人の繋がれた手は体温を分け合い、お互ひの鼓動を感じさせる。彼女の一言は、それが永遠でないことを僕に思い出させてしまう。心がトクンと音を立てて跳ね、下ろした瞼の奥で瞳が痛んだ。

「うん。良かつたんだ」

そう静かに言つた。確信を込めて。

「僕にとつて君は全てだつたのだから。最初から他の未来なんてなかつた」

栗色の髪がオレンジの光に天使の輪を作り、流れるように白いコートに落ちていった。あの時と全く変わらないままの姿で彼女は僕の隣に座っている。もう、ずいぶんと時間が経ってしまったのに。両手を田の前に翳して、年月を帶びた指を眺めた。今の僕は時間に逆らえず、すっかり年を重ねていた。これでは姉弟の立場が逆だと思った。

「そりやつて、あなたはずつと一人で生きてきたのですね」

そう彼女が微笑する。その笑みには、悲しみとか、憐みとか、慈しみとか、愛情とか、そういうものがいつぺんに詰まっていたから、心の一部が懐かしさに甘い痛みを感じる。

「でも、いつしてまた会えたじゃないか

「それも、夜が明けるまでですよ」

「そりなの？」

舞は小さく顎を引き、手に力を込めた。

「今夜はクリスマスですから、特別なんですね」

「それでも構わないよ。僕はもう一度と君に会えないと思つていたから」

「そりですか・・・」

教会の外を強い風が駆けて行った。遠くの方で木の枝のぶつかる音がする。微かに震えたように見えるステンドグラス。七色の影が

彼女の白いコートを揺らして、彼女が少し驚いたように口を開いた。

「あの日も、こんな風が時々吹いていたよ

「あの日?」

僕の言葉に首を傾げる舞

「君と僕が離れ離れになつた日」

無言で話の先を促す舞に、僕は唇を小さく震わせた。本当はあまり思い出したい記憶ではないのだけれど、それでも彼女には話さなければならない。二人の物語の続きを。彼女だからこそ。

そつと胸の端にしまった棘に触れるよつとして、僕は話始めた。

* * * : * * *

? broken wings (2)

『舞』。彼女の名前の由来は、その季節。

一月の特に寒かった日。雪が次から次に空から降っていた。それはやむことを忘れたように限りなく、地上の全てを真っ白に塗り替えてしまいそうなくらい止めどなく降っていた。

純白の世界。

そこに彼女は舞降りて來た。まるで穢れを知らない赤子を包むよう、小さな病院の外は真っ白だった。

羽の様な雪の『舞』の日。

『舞』は生まれた。

「だから、私の名前は『舞』なの」

冷たい風の吹く夜。思い出しそうに冬の厳しさが僕らの街に帰つて來た夜。僕と舞は教会の長椅子で話をしていた。

一月の寒い日。舞の生まれた日。

今日は彼女の誕生日で、その日と同じくらい寒い日だった。

「私としてはもっと可愛い名前が良かったんだけど……でも、その日から私は『舞』になつたの」

そう彼女は静かに言った。

小さな頭が僕の肩に預けられる。ジャケット越しに徐々に広がっていく体温が優しくて、そつと彼女の髪を指先で捕まえた。差しこんでくる七色の光が、髪に合わせて形を変える。

「それなら」と僕は言った。「舞は寒いのは得意なの？ ほら、寒い季節に生まれた人は寒さに強いって言うから」

「全然。関係ないみたいよ、それ」

掠れる声が面白そうにそう言った。

「なら、暑いのに強いの？」

「暑いのも苦手だわ」

「うん。知ってる」

大きな飴色の瞳が瞬きを繰り返し、

「智也も八月に生まれたのに、暑いのも寒いのも苦手じゃない」と慎ましく笑った。

ここは教会だから、高い天井に声が響かないようになに舞は小さな声で話した。僕もそれにつられるように小さくする。

蠟燭の灯り。月の明かり。

この場所はあまり明るくないから、小さな声でも耳に心地よかつた。たぶん、視覚が働いていない分、耳が敏感になつていてるからか

も知れない。

「ところでさ」とステンドグラスを見ながら、「今日は誕生日なのにこんなところで良かったの? せっかくだから贅沢して、ロマン入りない様なレストランとかでも良かったんだよ」と訊いた。

赤子と女性、そして、大きな翼を持つた男がビー玉の様な瞳で僕を見る。

「うん。ここに来てみたかったから

「クリスチャンでもないのに?」

「うん」

何となく、ね。

アルトの柔らかい声がそう囁いた。

「たまには神様に感謝したくなるじゃない? いつもやつて幸せに生活出来て、智也と過ごせて、愛されて。色々と幸せだって自分で思えることがあるんだけど、それを感謝したくなるのよ

「神様なんていないのに?」

「そうね。いると思う人もいるし、いないと思う人もいる。でも、私はいるように思えてならないのよ

「でも」僕は静かに言った。「いても何もしてくれないよ。そんなに暇じゃないだろうし、そもそも人間に 관심があるとは思えないし

薄い唇から貝殻の様な前歯が零れた。優しい瞳を瞬いた彼女は、「智也はリアリストね。でも、私はいると思うわ。だって、こんなに幸せでいられるのだから」と言つた。

舞。彼女は幸せなのだろうか？

僕は考えてしまう。純白の世界に生まれた彼女は今、幸福と言えるのだろうか？ たくさんのことを行つて、痛みや、不安と闘つて。いつも穏やかに笑つているけれど、時々舞が夜中に胸を押されてしまふ。苦しさに耐えているのを知つて、それなのに幸せなのだろうか？

けれど、彼女は僕の隣で笑う。

だから、この人は本当に強いんだな。そう思った。

天井の上。強い風が屋根を撫でるように音を立てて過ぎて行つた。本当に今日は風が強い。カタカタとステンドグラスが微かに揺れて、髪に移つた七色がざわめいた。

「ねえ、智也」僕の瞳を覗きこんだ舞は、「私たち別れましょう」と静かに言つた。

蠟燭の炎が揺れた。

「私の命はそんなに長くないわ。私が死んでしまつたら、あなたは一人になつてしまつ。だから、もう終わりにしましょう」

「そう・・・」

僕は彼女の言葉が突然過ぎて、何を言っているのか理解できなかつた。ステンドグラスを見つめながら、何度も反芻する。

「私は智也に色々なものをもらつたわ。もう、あなたにもらつた幸せで、残りの人生はやつていける。苦しくても、痛くても、我慢できる。だから、終わりにしましょ。」

いつものたわいもない会話をする時みたいに話すから、その言葉を飲み込むまでに時間がかかった。

誰と、誰が別れるんだ？ 別れるって、どういうことだらう？

弾かれたように舞の両肩を掴んだ僕。その強さに彼女が眉を寄せたのが分かったけれど、それを顧みる余裕はなかった。

「それって、どういうこと？ ちょっと意味が分からんんだけど

自分で分かるくらい慌てている僕とは違つて、舞は落ち着いた声で、

「私はもう長くないみたいなの。こんなのが自分勝手だつて分かっているんだけど、私は智也を愛しすぎたし、あなたも私を愛しすぎてしまつた。今距離を置かないと、私がいなくなつた後、あなたは駄目になつてしまつんじやないかつて」

「そんなことはどうでもいいよ。」

叫んだ声が天井に反響する。彼女の言葉の切れ端を理解し始めた僕は、唯、何を間違えたのか考え始めた。

「何？ 僕のことが嫌いになつたの？」

「やうじやないのよ。智也が好きだから終わりにするの」

教え諭すような舞の口調に、苛立ちを感じ始める。

「分からぬいよー そんなの。どうして急にそんなこと書ひの？」

「急じやないのよ。もう、ずっと前から考えていたことなの。私が死んでしまったら、あなたはどうやって生きていいくの？ そのことを真剣に考えたことがあるの？ 智也は本当に優しいけれど、優し過ぎることは危ないのよ。どこのまでも相手との結びつきを深めてしまう。だから、失った反動が大きい」

「そんなことない！ 僕は大丈夫。だつて、だつて・・・」

「分かつて、智也。私は大きな病院に入り直すことにしたの。だから、これからは会えないし・・・」

「いくら遠くても僕は通うよ。大丈夫だよ。大学の講義だつてうまく予定を組めば、毎日だつて通えるはずだし」

「智也」彼女は優しく囁く。「やうじやないのよ。私はいなくなるのよ。最初にあなたを縛つてしまつたのは私かも知れない。だから、こんな言い分は自分勝手だつて分かっているわ。でも、あなたは前を向いて生きていかないといけないのよ」

「そんなの知らないよー」

立ち上がつた舞の瞳はどこまでも深くて、優しくて、もつ、どんな言葉も届かないのだと分かつてしまつた。彼女は時々すごく頑固になるから、こうなつたら僕が何を言つても無駄なのは分かつてい

た。それでも、ここに引くわけにはいかない。

「舞と一緒にいられないのが僕の為なんて間違ってるよ。今更どうして」

大きな木の扉に手を掛けた舞は、風に髪をフワリと浮かせて、「私があなたを閉じ込めていると知ってしまったからよ」と言つた。

カツン、カツン。

煉瓦の上をブーツが蹴る。彼女の背に向かつて次々と言葉を投げるけれど、どれも一度固まつた心を溶かすことはできなかつた。西洋を想わせる街燈がどこまでも続く道。彼女のコートの裾を掴んだ僕は、かなり情けない奴だつたに違ひない。

「考え直してよ。こなんんじゃ、今すぐ僕は駄目になるよ」

必死だつた。彼女が僕から離れてしまわないよう。

「舞がいなくなるなら、どっちだって一緒にじゃないか！ お願ひだから、別れるなんて言わないでよ！ 姉さん！」

唯、必死だつた。

振り返つた舞は、変わらない優しい瞳から涙を流していた。僕らの間を冷たい風が通り抜ける。

「分かつて」

涙と一緒に零れる言葉。

「死んでいく私に出来るのは、もう、これしかないの」

それは静かだが悲痛な叫びだった。

僕に背を向けた舞。

終わってしまう。そう思った。もう、彼女が僕にだけ向ける特別な気持ちは、堅い心の中に押し込められていた。

「ビリビリ」と・・・

突然、震える声が僕らの背後から聞こえる。

「姉さんって、別れるってビリビリなの? 皐月くん」

街燈の下。紙袋を提げた七瀬が瞳を大きく開いてそう言った。

「どうして? 片思つて言つたじゃない。別れるってビリビリ」とよ。 それにどうしてその人のことを姉さんつていうの?」

七瀬に吐いていた嘘が頭を過る。動搖している彼女は、僕と舞を交互に見て、信じられないという風に、「嘘、を吐いていたの?」と言つた。

でも、僕は舞とのことで必死だつたから、「お前には関係ない!」と怒鳴つていた。

もう自分でもわけが分からなくなっていた。

『 露月くんは優しくない』

七瀬はそう言つたけれど、それは本当だつた。僕はちつとも彼女の気持ちを思いやつていなかつたし、そうする余裕もなかつた。僕は優しくない。唯、自分のことしか考えていなかつた。だから、こんな事になつたのだろう。

「姉さん。お願ひだからどこにも行かないでよー。」

「智也? ここの子は誰なの?」

一人、状況が分からぬ舞が七瀬を困惑して見つめる。

「ねえ、露月くん説明してよー。」

僕に怒鳴られた七瀬が眉を寄せて詰め寄つてくる。でも、僕はそんな彼女を今までにないくらい疎ましく思つた。悪いのは自分だといつのに。

「うぬわーー。」

七瀬の手を振り払つて叫ぶ。彼女は一度、悲しそうに顔をしかめた後、すぐ怒りで顔を真つ赤にして、

「あなたは誰なのよ!」と舞に詰め寄つた。

「えつ」

いきなり矛先が変わつて、齧えたように胸の前で両手を組む舞。

怒りに我を忘れた七瀬が叫んだ。

「全部嘘だつたのね！ みんな、みんな嘘！ 嘘つきー。」

すぐに、しまった、と思つた。

七瀬が舞の体を両手で強く押したのだ。

普通だつたら何でもないことだつた。でも、舞は極端に心臓が悪かつたし、動搖していたのも影響したのかも知れない。その場ですぐにしづくまつた彼女は耐えきれなかつたのか、煉瓦に顔を打ち付けるようにして倒れてしまつた。

「舞！」

「えつ？ ・・・ 何よ、それ・・・」

隣には真つ白な顔して瞳を見開く七瀬。今までの苛立ちが、急に冷えきつた汗に変わっていく。それは彼女も同じだった。

「舞！ しつかりして！」

舞の全身から脂汗が流れ、額には前髪が張り付いていた。薄い唇は血の気をなくして細かく震え、うまく呼吸の出来ずに、苦しそうに空気を求めて咽を鳴らす。その姿はさつきまで僕らが持つていた強い感情が全て一瞬で消えてしまつくりい普通じゃなかつた。

舞が壊れてしまう。そう思つた。

「私……何もしてないよ。唯、ちゅうと押しただけなのに」

「舞は心臓が悪いんだ！ 救急車を呼んで！ 早くー！」

・・・つて・・・え・・・・・。

ヒコ、ヒコウ、ヒ咽を鳴らしながら、舞が僕を見つめる。苦しそうに顔を歪めていたけれど、その瞳はとても優しいものだった。もし、女神というものがいるのなら、きっと彼女と同じ瞳をしているんじゃないかな。僕はそう思った。

「何？」

「『』、めん・・・・ね」

「どうして？ どうして謝るの？」

「迷惑、・・・・・かけて・・・・・」

言い終わらないうちに咳き込みだす舞。仰向けに僕の腕の中で体を折つて、苦しそうに額に汗を浮かべる。眉を寄せた顔は、びっくりするくらい真っ青になっていた。

「やつぱつ・・・・・罰があたったのかな？」

それでも口を開く舞をする舞を僕は遮つたけれど、左右にゆつくり首を振ると、

「私には過ぎた幸せだつたから。愛してしまつたのが……弟だから。きっと罰があたつたのかも、知れない」と言つた。

「今、救急車を呼んでいるから、話さないで休んだ方がいい」

「私はどうしようもないくらい、あなたが好きなの」

「もう話さないで、分かつていてるから」

辺りを見回し、七瀬が携帯に向かつて何かを叫んでいる姿を確認した。まだ助けは来ないのだろうか？　じりじりと心を焼いていく焦りに苛立ちを感じる。

「智也」

「・・・」

「お願いだから話を聞いて」

「・・・」

「ねえ」

鈴色の瞳の奥が濁り始めて、彼女の体から力が抜け始めたのが分かる。仕方なしに頷いた僕の頬に人差し指を這わせた舞は、「こんなことになるなら、勇気を出して別れるなんて言わなければ良かつたね。あなたを傷つけたのに、意味がなかつたね。ごめんね」と言った。

「そんなことないよ。僕が駄目だから、僕がしつかりしていいから、だから舞に言わせてしまつたんだ。舞が謝る必要はないんだ」

「ありがとう。」

舞は素直に頷いた。

残された時間はもう少ない。彼女は壊れてしまったのだから。それは取り返しのつかない誤ちで、とつてはいけない積み木のピースをはずしてしまったように、止めどなく命の欠片が崩れ落ちて行く、流れしていく。助けはまだどうか？ 焦れば焦るほど、時間が伸びていくみたいだった。

「ねえ、智也」

「何？」

優しい飴色の瞳が僕を見つめていた。

「私は天国に行けるのかな？」

ハツとして僕は舞に訊く。

「天国？」

「うん、天国に私は行けるかしら？」

アルトの声がそう囁く。

「天国なんて言つたら、まるで……」

「もしも、の話よ。でも、やつぱり私には無理かなあ

姉弟で愛し合っているから……。彼女はいつもそのことを気に

していた。自分のせいで僕まで地獄に落ちてしまふんじゃないかって。でも、もし舞が天国に行けないとしたら、こんなに魂の美しい人が行けない場所なら、天国と言つところに行ける人はいないのかもしれない。

「智也はどう思つ?」と掠れる声で訊く。

「僕は天国なんてないと思つけれど、舞なら行けるよ

「そうかな」

「うん」

「そうだと良いな」

「もし、舞がいけなくとも僕がいるから」

「智也が?」

「うん。舞がもし天国に行けなかつたら僕の翼を貸してあげるよ。だから絶対に大丈夫」

「翼、持つてるの?」

「さあ、一つぐらいあるんじゃないかな、こんな僕でも。だから、僕のと、舞のを合わせたらいけるかもしねりいよ、天国。・・・約束ね」

「約束?」

「そう」

「そつか、そしたら私は智也を迎えてこないとな。じゃないと智也は天国に行けないもの」

「そうだね」

クスクスと静かに彼女は笑った。

「でも、天国で神様に会つたとしても、文句を言つたらダメよ」

「それはその時に考えるよ」と僕は言つた。

彼女は智也らしいね、と瞳を細めた後、体を小さく振わせた。冷たい風が丘の向こうから吹いてきて、どこか遠くの街へと去つていく。

「智也の腕の中、あつたかいね」

「そつか?」

「うん。少しだけ、寝てていいかな」

どこか気だるそつに舞がそつ言つた。

「そうだね。少しだけなら」

「うん。ありがとう、智也」

フッと瞳が笑う。

「・・・うん」

「ありがとう

そう言つた彼女から、全ての力が抜けたのが分かつた。僕の腕の中で舞がびっくりするくらい重たく感じる。だから、死んだ人間は重くなるなんてことを思い出して、どうしようもなく悲しくなった。彼女は死んでしまつたのだろうか？

遠くの方で七瀬が携帯に向かつて何かを話しているが見える。ところどころ通行人が僕らの方に好奇の目を向け立ち止り始めた。

「ねえ、舞。あんまり寝すぎたらいけないよ。風邪を引いたらどうかうらね

真つ暗な空には金色に輝く月。人間の全てを見てきた光は、僕らを見て沈黙する。

重力に何の抵抗もせずに、彼女の手が煉瓦に落ちた。僕は慌ててそれを包み込む。結構激しくあたつたから、舞が起きるんじゃないかつて思つたけれど、穏やかに閉じられた瞼は少しも動かなかつた。

ちらほらと僕らを囮み始めた人垣から、一人の男性が目の間に膝を折つた。彼は素早く舞の手首をとり、瞼を指先で押し上げると、僕の顔をジッと見つめて言つた。

「彼女は死んでいるんじゃないのか？」

「え？」

彼の厳しい声が辺りに向かって飛び、それを合図に動き出す人た
ち。遠くの方でサイレンの音が聞こえて、辺りが騒がしくなっ
た。

「ねえ、舞。君は死んでしまったんだね」

彼女を抱き抱えたまま、僕は月を見上げた。漆黒の夜空に星はな
くて、厚い雲が頭上を覆い始めていた。強い風が通り過ぎる。

「僕は一人になってしまったよ」

ポロリと言葉が煉瓦に零れた。拾ってくれる人が誰もいないから、
寂しそうに耳に転がる。

舞の穏やかな顔を見ていたら、軽く体を揺さぶつたら眼を開ける
んじやないかって思つたけれど、バランスを失つた小さな頭が栗色
の髪を波打たせながら、ガクリと垂れて動かなくなつたから、僕は
彼女がもう一度と目覚めないことを理解する。良く知つている甘い
香りが辺りに広がつた。

「ああっ・・・」

小さな嗚咽が体の底から湧きあがつて、開いた目から涙が溢れ出
した。膨れ上がる悲しみに呼吸が苦しくなつて、胸を搔き鳴りたく
なつた。現実に理解が追いついた瞬間、僕の体の芯は悲しい声で埋
め尽くされてしまった。

「誰か！ 誰か、助けて下さい！」

人垣に向かつて叫んだ。氣の毒そうに田を反らす人や、好奇心からその場に留まる人が随分と遠くに見える。

「早く、舞を」

月に向かつて叫んだ。厚い雲のせいで濁つた力のない光が僕を見つめ返してくる。その近くには一つも星が出ていない。

「舞を助けて下さい！」

その願いが叶うのなら、本当に死んでも構わないとthoughtた。でも、彼女を助けることは誰にも出来なかつた。そう、誰にも。

「助けて下さい・・・助けて・・・」

煉瓦に顔を擦りつけて、僕は願つた。飴色の優しい瞳は瞼に確りと隠され、腕の中に抱えた体温は冬の空氣と変わらなくなりつつある。失われていく彼女の存在を僕はどうにか繋ぎとめようと必死に助けを求めたけれど、零れる命を繋ぎとめることは無理みたいだつた。

それでも僕は泣きながら言つた。

「舞を、助けて・・・助けて」

愛する人を助けてくれ、と。

もう、僕にはどうするにもできないから・・・舞を助けてくれ

と、願つた。

一月の寒い夜。冷たい風が吹く誕生日に、彼女は死んだ。

* * * * *

沈黙を纏つた冷たい冬の空氣に向かつて、僕の話に耳を傾けていた舞がそつと息を吐きだす。気が付けばステンドグラスの外がうつすらと明るみを帶びて、差しこんできた薄藍色の光が蠟燭の炎を薄めていた。クリスマスの夜が明けようとしていた。

「それが私の最後なのですね」

「うん」

飴色の瞳が悲しそうに揺れて、繋いだ手を確りと握る舞。

「あなたはそれからずっと独りだつたのですか?」

たぶん彼女は心配しているのだろう。あの口言つたように、自分が居なくなつて、星が月を失つたように僕が迷子になつたんじやないか、と。

僕はその問いには答えずに、

「約束を果たせて良かつたよ」と微笑した。

「約束・・・」

「そう。舞が天国に行けるよう、僕の翼をあげるつて約束。ずいぶんと遅くなつてしまつたけれど、果たせて良かつたよ。でも、君のその様子を見ると、必要はなかつたかな?」

舞が死んでから十五年が経ってしまった。僕はとっくに三十を過ぎて、もう若いとは言えない。でも、彼女はあの日と変わらない若くて魅力的な容姿をしていたし、記憶にある通りの美しい魂をしていた。だから、僕はそう言つた。

「そうですね。私のいた場所は確かに地獄ではありませんでした。でも、天国とも違いますよ。それはあなたも来れば分かることです」

「僕も、同じ場所にいけるのかな？」

不安に駆られて問いかけた僕に、彼女は優しく細められた瞳で、「もちろん。あなたがそれを望むのなら」と言つてくれた。

だから、懐かしいような、悲しいような、嬉しくて温かいけれど、どこか切ない。そんな気持ちになつた。

「ずいぶんと僕は独りだつたけれど、一人ではなかつたよ」と、静かに僕は言つた。

先ほどの舞の質問に対する答え。矛盾した言葉に、舞が「えつ」と訊き返す。

ステンドグラスから見える空が、時間のないことを教えてくれたから、「僕の傍に君はいなかつたけれど、僕の隣には色んな人が居てくれたから」と過去の話に戻る。物語の続きへ。

「そうですか。聽かせてくれませんか？ あなたがどうやってこの場所に辿りついたのかを」

「うん。でも実はそんなに話す」とはないんだけどね」と笑う僕。

「それでも訊きたいです、私は」

僕の好きだつた飴色の瞳が優しくそう言って、やつぱり舞は変わらないなと思った。

「そうだね・・・」

辺りが薄明りに包まれ始めていた。空は朝の光をぼんやりと映し、心なしかステンドグラスの光も明るくなつたように思えた。あと少し彼女と居られる時間はない。だから、出来るだけゆっくり時間が過ぎることを僕は願いながら、彼女に話を聞かせる。

クリスマスの夜が終わろうとしていた。

* * * * *

直接腰を下ろした砂浜は、思ったよりも堅い感触だった。やがてらとした荒い粒子が手のひらに付き、投げ出したジーンズの裾に纏わりつく。試しに入差し指で表面をなぞると簡単に線が引けて、なのに少しも柔らかくないのを不思議に思った。優しい波が満ち引きを繰り返す。

「久しぶり・・・だね」

隣に座る七瀬がそう言った。

「うん。一年・・・になるかな? つい昨日のことみたいに思えるの、もつそんなに経ってしまったんだね」

僕にはちつとも悪気はなかつたけれど、彼女はすまなそうに俯くと、

「じめんね」と小さく言った。

舞が死んでから一年が経つた。直ぐに春がやつてきて、夏になり秋が過ぎて、気付くとクリスマスに街がにぎわっていた。あちこちが不思議な幸せに満ちていて、小さな教会の周りでは慎ましく聖夜が祝われている。

「七瀬のせいじゃないから、だからもう忘れてもいいんだよ

金色の月の光を浴びて、キラキラと輝く漆黒の髪。ボーテールにするにはずいぶんと長くなつたそれを、彼女は緩く胸の辺りで一つに結んでいた。短いスカートからは形のいい足が伸びて砂を小さ

く搔く。

「でも、舞さんを殺したのは私だから。ずっと忘れる」とはできないよ

僕は膝を抱えた七瀬を見つめて、ゆっくりと溜息を吐く。

「仕方なかつたんだ。皆がそう言つたら、七瀬が殺したなんて誰も思つてないよ」

「でも」と小さな声が悲しそうに、「私のことを恨んでいるでしょ？　いいえ、恨んでくれないといけないわ。私は皐月くんの大重要な人を奪つたのだから」と言つた。

たぶん七瀬は僕に責めて欲しいのかもしれない。誰もが慰めの言葉を掛ける中、彼女自身が一番自分を責めているから。けれど、あの日のことを悔やんでいるのは誰よりも僕なのだ。だから七瀬の気持ちには痛いほど良く分かつた。

「もういいんだ。今更舞が戻つてくるわけじゃないし、彼女は許してくれると思う。結局自分を責めても、それは自己満足でしかないんだよ」

「……自己満足？」

「うん」

僕は頷くと彼女の瞳を覗きこんで出来るだけ優しく言つた。

「舞が死んで、僕は泣いたり、怒つたり、呪つたり、呻いたりした

んだ。・・・それはもう、自分の中にこんなに激しい感情があつたことにびっくりするくらいにね。だけど、それで変わったことは何もなかつた。そして、気付いたのは舞が居ればそんな僕を怒るだらうこと。だから、僕は舞の為に苦しんでいたわけじゃなくて、自分の為に泣いていたんだよ。きっと七瀬のそれも同じだと思つ

考え込むように自分の足の先を見る七瀬。一定の間隔で打ち寄せる波が細かい粒を飛ばしながら、泡を立てて引いて行つた。水面には月が作つた光の道が揺れる。

「そう。皐月くんがそう言つのなら、そうなのかもしれないね」

「うん」

あの日、僕がほんの少しだけ自分の気持ちを抑えることができたなら、舞は死ななくて良かつたのかもしれない。そう思つて随分と自分を責めて来たけれど、彼女は帰つてこなかつた。狭い部屋の中で、一人空を眺めて後悔と懺悔を繰り返したけれど、それは意味のないことだと分かつてしまつた。段々と薄れていた彼女の香りが、終に消えてしまつた時に・・・。

綺麗な横顔で七瀬が訊く。

「これから、どうするつもりなの？」

押し寄せる波が静かに引いて、湿つた砂が月の光に煌めいた。

「そうだね。僕は色々な国を旅しようかと思つ。それが舞の夢だつたし・・・。そして、いつかこの街に、彼女との思い出の詰まつたこの場所に戻つてこられるようになればいいと思うんだ」

「やつか。じゃあ、暫くお別れなのね」

「うん」

寂しそうに伏せた睫毛が銀色に輝く。

たぶん一人とも分かつていた。この別れは暫くではなくて永遠になるんじゃないかなって。それでも、いつかこの世界のどこかで七瀬と顔を合わせることがあるなら、笑顔で言葉を交わせればいいと思う。心に痛みを感じながらじやなくて、懐かしくて切ない想いに胸を躍らせながら。

「なら、私は行くよ」

そう言って立ち上がった七瀬の髪から、潮の香りが微かにした。海岸線に並ぶ閑静な住宅から漏れるイルミネーションに照らされて、形の良い瞳の奥が輝く。

「やつ。じゃあ、また」

軽く手を挙げて見せる僕。

「うふ。また」

七瀬は踵で大きく砂浜に足跡を残したかと思つと、一度も振り返らずに海を後にした。砂を搔く音が足跡と共に遠ざかつて行く。

ザザアン・。。。

押し寄せる波が背中で弾け、幾つもの気泡が満天の星の下で弾ける。欠けた処のない月が透明な色で彼女を包んでいた。

『さよなら』

こんなに綺麗な場所にその言葉は似合わないから、代わりに僕は小さく手を振った。少しだけ大人びた後姿に向かって。

「それで」と白み始めた空氣に向かつて舞が言つた。

クリスマスの夜は過ぎ、既に『夜』と呼べる時間は終わりを迎えていた。新しい朝の太陽が徐々にこの街を照らし始めている。左右の壁に設けられた蠟燭はすっかり小さくなつていて、弱い炎を揺らしているだけだ。

「あなたはずっと色々な国を旅して來たのですか？」

「うん。寒い国、温かい国、自然の多い国、少ない国、食べ物のおいしい国、食べ物がろくにない貧しい国、人の優しい国や冷たい国。。。本当に色々な国へ行つてきたよ」

繋いだ手。指先を撫でるよりよつと離して、彼女が立ち上がりた。そして、『アートの端を浮かせて僕に向き直ると、
「どの国が一番良かつたですか？」と訊いた。

「どの国も良かつた。でも、やっぱ僕の居場所ではなかつたと思

「う

「そうですね

分かつてゐる、ところより彼女は小さく、でも確りと頷いた。

「思い出してくれた？」

僕の微笑に応えるよつて切なくじつを下げる

「ほんと。あなたの話を聞いて・・・もうほんと思い出してもいました、昔の記憶を。私の居場所は智也の隣。そして、智也の居場所も私の隣です」と言つた。

一步、一步、タイルを彼女が踏むたびにその音が天井に響いて繰り返される。遠ざかっていく足音。それは本当にゆっくりと少しずつだったのに、確実に扉に向かって伸びて行く。だから、一夜限りの舞との再会がもう終わるのだと分かった。

「智也?」と彼女が訊く。

「あなたは幸せだったかしら? 私と一緒にいて」

僕はゆっくりと立ち上がり、

「もちろん幸せだったよ。今は君を失つてしまつたけれど、それでも君に出会わなければ良かつたと思つたことはないよ」と言つた。

飴色の瞳が小さく瞬きを繰り返して、僕をジッと見つめる。朝の光が長い睫毛に沿つて揺れるから、彼女が泣いていることを知つてしまつ。僕は手に力を込めて、この瞬間を心に焼きつけようとしていた。薄明かりを受けた髪を、切なそうに伏せられた瞳を、薄い唇を、桃色に染まつた頬を。

「ねえ、智也? あなたは奇跡がないと、まだ思つてゐるのかしら?」

いたずらっぽく笑つて見せて、なのに震える声でそう聞く。

「『ない』と、言つたかったけれど、あるのかも知れないと言つた方がいいのかな」

クスクスと嬉しそうに声を上げた彼女。

「智也」ひじに答えたわ

「うん」

「なら、智也は世界が明日終わってしまうとしたら何を願う？」

扉の前で足を止めた舞は、真剣な顔になつてそう言った。

「舞の幸せを望むよ」

「明日世界が滅びてしまつたの？」

「やうやくだよ。他に臨むことは何もない。舞は？」

「そうね。私も智也の幸せを望むわ」

「明日世界が滅びてしまつたの？」

「やうやく。私が智也を幸せにしてあげられるよ！」お、望むの……

「一人がお互いの幸せを願っているのだから、やうやく……と僕が言った。

その後を引き継ぐようにして、

「私たちは幸せになれるわ」と舞が微笑する。

クリスマスの夜はすっかり明けてしまった。彼女が手を掛けた扉

から漏れる朝の光が、ゆっくりと冷たい空気と一緒に湿った煙の匂いのする教会に流れ込んでくる。七色の光が僕の背中に強く煌めて、彼女の影がゆっくりと外の世界に消えて行こうとしていた。

「愛してるわ。智也」

アルトの声がそう言つた。応えるように確りと頷いて見せて、「愛しているよ。舞」と僕は笑つた。

重たい木製の扉が唸り声を上げながら大きく開き、一瞬のうちに冬の空気が頬を駆け抜ける。朝の光の中に掠れて行く舞の影をジッと見つめながら、僕はまた訪れた二度目の別れに目頭が熱くなつた。

「智也・・・」

彼女の声が聞こえたような気がして返事を返そうと口を開いたけれど、開かれたままの扉の外にはもう舞はいなくて、唯、朝の街がひつそりと佇んでいるだけだった。

教会と、僕と、ステンドグラス。

天使になつた舞は、朝の光に溶けて行つた。

彼女のいなくなつた教会は随分と静かだつた。自分の息遣いが高い天井に反響して、いつもより大きく聞こえる。踏み出したタイルの上。足を進めるたびに冷たい光の中を嬉しそうに音が駆けて行つた。

舞との再会。そんな機会が訪れるなんて、普通なら思いもしないだろう。でも、どうしてか僕は、この街に戻ってきた時から舞の気配を感じていたのだ。二人で行つた喫茶店のカウンターに、彼女が好きだつた雑貨屋のウインドウに、そして小さな道端の花を見て喜ぶ影に目を擦つたり。だから、教会で舞の姿を見つけた時、僕は何故だかあまり驚かなかつた。そこにいることが最初から分かつていたみたいに。

「あれ？」

大きな扉を後に外に出ると、パラパラと柔らかい物が顔に当たつて解けていった。見上げると、朝陽のせいで金色になつた雲と冬特有の高い空があつて、ゆつくりと舞う白い結晶が天使の羽見たいにヒラヒラと・・・。

『きっと、今、私たちの上を天使が通つているの』

そう言つた舞の言葉を思い出した。

だからかも知れない。

僕は大きくて綺麗な翼を広げた舞がこの空を飛んでいるよつた気

がした。キラキラと輝く真っ白な雪を降らせながら。

十一月一十六日。枝を剥き出しにした樹木が寒さに体を揺らして、教会の高い鐘楼が今日の始まりを告げる。止めどなく降り積もる天使の羽はこの街に幸せを運び、僕の頭に、肩に、手の平に、足に、静かに留まつて止まなかつた。

きっと、この街は、今世界で一番幸せな場所なのかも知れない。階段に腰を下ろして朝陽を眺めながら、僕はそう思えてならなかつた。

fin

? love song for my a n g e (後書き)

長らくお付き合いありがとうございました。感想やアドバイス等ありましたら、教えていただけすると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3923u/>

天使に愛の歌を

2011年12月29日18時48分発行